

---

# とある魔法少女のクロニクル

yanagi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔法少女のクロニクル

### 【Nコード】

N4708U

### 【作者名】

yanagi

### 【あらすじ】

本作はArcadia様にて違うPNで連載しているものを改題、改訂、加筆、修正したものであり、魔法少女リリカルなのはと自作の『魔法少女もの。』を叩き台にしたもののクロスオーバーで、趣味全開で書きました。叩き台にした都合上、『魔法少女もの。』と一部シーン、台詞などが被っています。實力不足なのは重々承知しておりますので生暖かく笑ってスルーしてください。

末期戦風味魔法少女架空戦記というにつちで正直誰得なものです

が、楽しんでいただければ幸いです。

## Ep.00

そこは第九十七管理外世界      地球のある世界      に良く似ていました。

でもそこは決定的なまでに違う点がありました。

重なる歴史、異なる歴史。

積み重ねられたものは違うけど、そこで生きる人達は一生懸命に生きていました。

手にしたのは新しい出会い。

出会ったのは私とは違う魔法。

リリカルなのは、始まります。

『とある魔法少女のクロニクル      世界を渡って境界線を抜けて』

白銀の山脈が連なり、雪が降り止むことのない世界。

そんな静寂こそが相応しい世界の一角は今現在場違いなほどの騒音に満ちていた。

原因は明確。

二人の少女、管理局所属の魔導師である高町なのはとヴィータが魔導兵器と戦闘を繰り返していたからだ。

「これで、終わりだっ！」

ヴィータは言葉と共にグラーファイゼンを勢いよく振り下ろした。最後の一体である魔導兵器Ⅱ卵型の外見／二対の特殊合金製の触手／赤く灯るモノアイ／一山幾らの雑魚といった風情。またそれを裏切ることはなくヴィータの一撃によりわけなく大破。背後に累々と残骸を晒す同型機と同じ運命に。

完全に破壊したことを確認するとヴィータは雪が積もっていることなどお構い無しにその場に座り込んだ。

その周囲からは時折、爆発音が響く。

「やっと終ったな……」

周囲を見回し、肩で息をしながらヴィータは言った。

「うん、しょうがないとは思っけど聞いてた話と全然違ったね……」

なのはは相槌を打つ。その顔はヴィータ同様疲労の色が濃い。

「本当に、冗談じゃねえって……」

ヴィータは愚痴を零す。

「にゃはは……」

その愚痴になのはは苦笑するしかなかった。

ヴィータだって分かっているのだ、なぜこうなったかを。なにせ、原因は明白である。要するにマンパワーの不足。それも直ぐには解決できないほど圧倒的に人手が足りないのが原因だったのだから。

## 時空管理局。

数多の世界を管理運営する組織。

その規模は巨大であり、その権限もまた巨大だった。だがそれでも星の数ほどと形容していい次元世界を全てカバーするにはどうしようもないほど不足しており、今回のような管理局がその存在を知っていた程度の管理外世界のことまで完全に把握するのは不可能であった。問題点は誰もが知っていた。だけれど、それが解消されることは無いのだからとも内心では理解してもいた。マンパワーの不足。それは一朝一夕で解消される類のものではない。

本来、管理局内でも知っている者の方が少数派であろう雪が支配する白銀の世界になのは達が出向く理由となった案件があった、それがスクライアー族によって新たに発見された古代魔導文明の遺跡群により発見されたジュエルシードに匹敵する魔力結晶体だった。

既に魔力結晶体自体はスクライアー族及びその護衛として派遣されていた武装局員一個小隊によって確保され管理局に運びこまれていたが、肝心の遺跡群の中核と目されている神殿へ到達することが出来なかった。勿論、理由があった。防衛システムが生きており一個小隊程度の戦力では危険性の排除が不可能だったからである。

火急の用件というのは幾らでもあった。

それでもジュエルシードに匹敵する魔力結晶体、しかも外郭遺跡から発見され、中心部にはより危険性の高いロストロギアが存在する可能性が高く、またロストロギアの盗掘を生業とする武装集団が遺跡を狙っているという情報（後日、誤報であったことが報告される）も優先順位を向上される要因になった。

その為、規模を増大させた調査団に先立ちある程度の危険性の排除を目的とした少数の高ランク魔導師による先遣隊が送り込まれることが決定された。

それがオーバーAAAクラスであるのはとヴィータだった。

そして現在に至る。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

小休止を終え、立ち上がるとBJについた雪を叩き落とす。

「ああ、さつさと終らせようぜ」

そついうとグラーフアイゼンを肩に担ぐと、二人は飛翔魔法を展開させた。

神殿、直上。高度五百メートル上空。

不意の閃光／レイジングハートによる警告／予想外の衝撃Ⅱ墜落。

「なのは！」

ヴィータの声、だけれどなのはに認識されず、半ば失いかけた意識のまま墜落。

「……っ！」

急いでなのはを助けようとするところへ眼前に敵影が出現。先ほどの魔導兵器に似た外見、数は先ほど同様多数、阻まれ助けることなど不可能。

その間も落下は継続される。

直ぐに訪れるだろう情景。

それを覆そうとヴィータは必死に追いつこうとするが魔導兵器に邪魔され届かず。

そこで予想外の出来事が起きる。

「何だアレ！」

突然空中に現れる黒い孔。

まるでブラックホールのようなそれは周囲の空間され捻じ曲げているのか陽炎のように歪んで見える。

其処へ吸い込まれるように落下を継続していくのは。

まるでそれを守るようにして布陣する魔導兵器の群、群、群。

その数は増してゆき両手両足の指の数の数倍以上。

「畜生っ！ どけ、どけよ、お前らっ！」

グラーファイゼンを振るい進路上に存在する魔導兵器を撃破していく。

それでも尽きることなく出現する魔導兵器。

「ラケーテンハンマー！」

加速しながら魔導兵器を数体まとめて破壊する。

縮まる距離。

急激に消費される魔力。

既にカートリッジの数は片手の指の数におさまるほど。

如何にA A Aランクの魔導師といえど何時果てることのない数の暴力の前には敵わず、また連戦であり時間制限のある限定条件化であつたことが拍車をかける。

それでも諦めない。

必死に加速し、薙ぎ払い、なのはの元へと飛翔する。

手を伸ばせば届く。

そう確信させる距離。



グラーファイゼンを握る手とは逆の手を伸ばす。

「届けっ！」

なのはの白いBJに手が届く、瞬間。

確信を打ち砕くように先ほどと同様の閃光が空間を走り二人を分断させる。

同時刻／神殿の中枢部。

其処に存在する魔力結晶を動力源にする魔導機／一種の転移装置。主を失ってなお動作する機械、されど経年劣化により歪が生じる。本来任意の場所に時空間移動することが可能であったが既にその機能は失われ、一方通行のランダム転移のみ可能。

周囲の魔力を収集するシステムが仇となり、AAAランク魔導師の戦闘という高密度な魔力をキーとし、数千年ぶりの稼動。そしてその結果　。

「なのはーっ！」

伸ばした手は届かず、黒き孔へとなのはは墜落した。

白き魔導師の消失。

後日、時空管理局は　、  
時空管理局本局武装隊、航空戦技教導隊第5班。

局員ID：STX01220-015214229  
高町なのは三等空尉のMIA認定を正式に決定した。

\*

富士の裾野に広がる大地。

大日本帝国統合軍／富士裾野演習場。

晴れ渡る蒼穹、高度三千メートル上空に浮かぶ黒い孔。

ホールと呼称されるそれを眺める人物。

「で、様子はどうなんだ？」

無精ひげ／ぼさばさの髪／隈の浮かんだ顔〓寝不足を体現したような表情。

漸く寝入ったところを起こされ、不機嫌を隠そうともせず、男〓大隊長補佐結城一郎太中佐が質問する。

「はい、微弱ながら次元振動を感知しました」

実年齢は四捨五入すれば三十のはずだがいまだ十代に見える副官がそれに応えた。

「つつことはもう直ぐくんのか。で、うちの隊長さんは何処だ？」

「隊長でしたら、いつものトレーラーにおられます」

「うん、なるほど」

一つ肯くと結城はトレーラーへと向かう。

それは移動司令部であり、独立機動群第501教導技術大隊の指揮機能の中枢部であった。

結城は数台の大型トレーラーの内の一台に乗り込む、車内は大型モニターに占拠されている壁面を楽しげな眼差しで見詰める軍服の上から白衣という奇妙な服装の人物と刻一刻と増加していく情報処理の為の人員がいた。

白衣の人物「大隊長である片倉シロウ技術少将は結城を目ざとく見つけると軽く手を振りながら呼ぶ。

「やあ、おはよう。どうだい、よく眠れたかい？」

「見た目どおりですよ」

「あはは、それは残念だったね。君、えーつと工藤君。コーヒーでも入れてきてくれないかな、僕には甘くて彼には苦いの」

「はい、わかりました」

片倉は結城の副官である工藤にコーヒーを命令すると、視線をモニターに移してから再び結城に向けた。

「それで、この状況をどう思うかな？ 結城中佐」

にんまりと目を細め結城を見る片倉、楽しげに。

「そうですね。ちょっと妙なところがありますが、いつものように分隊規模の架空存在が顕現して終わりじゃないですかね」

それになれた様子で応える。モニターに映るホールは極見慣れた

もの。

「うーん、そうかもしれないし違いかもしれないよ」

「といますと？」

「まだデータの絶対数が少ないから確定とまではいかなければ、  
久々に来るかもしれないよ、希人が」

「本当ですか？」

正直信じかねるといったニュアンスで結城は応じた。

希人 違う世界からの訪問者／異邦人。

「まあ、可能性の話ではあるけどね、良く似てるんだよ」

「良く似ている？」

「ああ、良く似ているよ。二十年前のあれに」

片倉は言いながら視線をホールが映っている中央の大型モニター  
に向ける。同じように結城も向けた。

「……………」

結城は無言のまま画面を見詰めた。

「次元振動、感知。増大していきます。戦術サーバー 賢人  
より回答。推定顕現時間までおよそ5分」

オペレーターの一人が言った。

「お、いよいよだねえ」

それを聴き、嬉しそうな声を上げ、片倉は手元の情報デバイスに指示を出す。

「はい、これ」

結城は受け取ると、画面を確認する。

顕現予想戦力である一個小隊規模の架空存在相手には過剰とさえいえる戦力配置〓それを可能にする富士裾野演習場という場所。

「あれだね。もし、架空存在だったら袋のねずみっていうか運がないね」

「いいことです。市街地にでも現れたらことですよ」

顕現頻度で言えば日本は他の国に比べて少なく、また恒常的に存在し続けるホールが存在しないという点でも幸運だった。

「まあね、去年の北海道は酷かったからね。函館だったわけ？ 時計台が壊される映像は中々とショッキングだったね」

片倉が口にしたのは昨年に起きた第三次顕現でのこと、当時函館上空に出現したホールは一個中隊規模の架空存在を顕現させ消滅し、顕現した架空存在は函館の町で破壊の限りを尽くした。結局は第七師団と第503教導技術大隊の共同作戦にて殲滅したが、函館の復興は今だならず破壊の痕は残っていた。

「まあ、彼女達がいれば大丈夫だと思うけど、そんなわけで結城中佐。彼女達をよろしくね、三号車で待機してるから」

「わかりました」

出口、丁度、コーヒーの入ったカップを二つ持った工藤と出会う。工藤の手からカップを受け取るとそのまま三号車に向かう。

「中佐」

結城の背に向け工藤はいった。

「ああ、工藤君。ちょっと遅かったね」

にやにや笑いながら立ち上がると、片倉はカップを受け取り一口嚙下する。

「三号車だよ。彼女達の出番だ」

そう言って工藤の背中を叩いた。

三号車車内。

一号車とは違いある存在のための装備で空間が満たされていた。

「そろそろ来る頃じゃないかと思ってましたよ」

技術主任である直枝技術少佐が歓迎するように片倉に言った。

「ああ、久々の出番だ」

その言葉は直枝の背後にいる三人の少女達に向けられたものだった。

「待ちくたびれたよー、中佐」

少女Aの発言 薄い茶のボブカット／悪戯猫を連想させる切れ長の瞳／無駄な肉がないすらりとした肢体 円條寺虎子〓5011小隊特別魔法戦技官。

「本当だよ。お婆ちゃんになるかもって思いました」

少女Bの発言 柔らかなロングヘア／兎のようなパツチリとした瞳／女性的というしかない丸みを持った肢体 叶野ツバサ〓5011小隊附特別魔法戦技官。

「それは言いすぎですが、そのぐらい待ったという感想ですね。時間の経過は相対的なものですから」

少女Cの発言 艶やかな黒のツインテール／仔犬のような風情の瞳／年齢よりもさらに幼さの残る肢体 芳野そら〓5011小隊特別魔法戦技官。

魔法戦技官。

それこそが少将が大隊を率いる要因となった存在。  
大日本帝国統合軍最強の戦術存在。

人類の切り札。

そして　魔法少女と呼ばれる存在。

\*

『予想時刻まで残り三十秒。十秒前からカウントスタートします。  
………10・9・8・7・6・5・4・3・2・1・イマ』

瞬間、ホール周辺の空間に激震が走り、黒い孔から一つの物体が吐き出されるようにした出現した。

それは通常の架空存在が顕現とは違っていた。架空存在の場合は最初からその場に存在していたかのように姿を現すが、今回はまるで他の場所から持って着たかのような印象を受ける。

「うん、やっぱり架空存在じゃないね、あれ。画面最大まで拡大して」

最大限まで拡大して映像がモニター一面に映し出される。

瞬間、その場にいたほぼ全員が驚きの声を上げた。

「子供……？」

オペレーターの一人が発した言葉がその全てだった。

特別魔法戦技官たちとさして変わらない年齢に見える少女が、ホールより現れ、墜落している。意識がないらしく動く様子はない。

「結城中佐、彼女達をだして回収して」



片倉の命令に肯き指示を出す。

「5011小隊出撃、目標を確保せよ」

ほぼ同時に三種の『了解』という返答。

三号車後部が開き、三種の閃光が飛び立った。

「二人とも競争だ！」

「ことら、どんな危険があるか分からないんだから慎重に」

「そらったらいつもそう。大丈夫だよ。ボクは強い子だからね」

諫めるようなそらを遮り、なお虎子は言った。

「そらちゃん。私たちがフォローすれば大丈夫だよ」

「はあ、しょうがないですね。可及的速やかに任務を達成しまし  
よう」

しょうがないと内心でため息をつき、そらは肯いた。

高町なのはは現在万有引力の法則に従い落下を続けていた。このまま落ち続ければ、如何にBJを装着していても無事ではすまないだろう。本来のなのはだったら何の問題もないのだが、意識がない現在命の危機といってよかった。

そう、このまま落ち続ければ。

だけれど救いの手はやつてくる。

三種の閃光と供に。

高町なのはの出現から既に半日。

富士裾野演習場から大隊所属の簡単な手術程度なら可能と言う大型トレーを改造した救急車に乗せられ、長野県／統合軍松代研究所内総合治療室に運ばれたなのは、現在、安らかな表情とは裏腹の酷く苦しい表情を浮かべていた。

規則正しい音〓ベッドの傍らに吊られた点滴／壁にかけられている時計の秒針。

「悪い夢でも視ているみたいだね」

ベッドの傍らに置かれた椅子に腰掛けている人物〓大隊長である片倉シロウが言った。彼はつい先ほどまで本来の事案及び突発的に起こった今回の件についての当面の報告及び対処をしており、この病室に訪れたばかりだった。

そんな短い間でさえも、なのはの呻き声をすでに片倉は片手の指以上の数を聞いていた。

「そうですね。先ほどは酷くうなされていましたし、汗も随分とかいています」

片倉の言葉に同意をしたのは、艶のある黒髪／フレームレスの眼鏡／染み一つない純白の白衣／才女といたいでたち／治療室の主／松代研究所所属特別魔法戦技官担当管理官〓美嶋玲香だった。

「うん、早く眼を覚まさないかな。それが互いのためだよ本当に…」

…つと、噂をすればなんとやらだよ。フロイラインが目覚めそうだ」

嬉しそうに顔を上げ、三島に笑顔を向ける。美嶋は片倉のその仕草に思わず苦笑を顔の片隅に浮かべながら、職分を全うする為にベッドに近寄る。

「じ、こは……」

どこだろうと続く言葉が出てこなかった。

「気がついた？」

優しい声音がなのはの耳朵を打つ。

「おいしゃ……さん？」

なのはは目の前にいる白衣姿の女性に見覚えはなかった。それでも覚醒しているとはいいいがたい朦朧とした意識の中、白衣姿であることから医者であることを連想した。

「そうよ、私は貴方の言うように医者をしているわ」

柔和な笑みを浮かべ、なのはの呟きを肯定した。

何で、お医者さんがいるのだろう。確かわたしはヴィータちゃんと一緒に……。

そこまで思考して、思い出した。

不意の閃光／レイジングハートによる警告／予想外の激しい衝撃／ヴィータの自分の名を呼ぶ絶叫。

そっか……。わたし、落とされちゃったんだ。

油断だった。どうしようもないほどの油断だった。連戦に次ぐ連戦に体力が削られ、判断力が低下していた。だけどそれはただのいい訳だった。しなくちゃいけない周囲の警戒を半ば解いていた。だからこそその予想外の不意打ちを受け、墜落したのだ。

謝らなくちゃ、それにありがとってお礼も言わなくちゃ。

ヴィータちゃんだけじゃなくて、迷惑をかけてしまった全員に。

なのはは其処まで考えると、自分が今どんな状況になっているのか臆気ながら察しがつき始めた。どうやら自分は負傷しどこかの病院にいるらしい、と。

そして状況を少しでも把握しようとなのはは目蓋を瞬かせ、顔を動かそうとして酷い痛みを覚える。そして身体が動かせないことに気付いた。全く動かせないというわけではないけれど、動かそうとするたびに鋭い痛みが駆け巡る。生憎と首は固定されているので顔自体を動かすことは出来なかった。それでも表情を痛みに曇らせながらも周囲を見回すようにゆっくりと眼球を動かした。

「無理はしなくてもいいの」

美嶋はそう言ってなのはを諫める。無理をしていいときといけな  
いときがある。今は後者だった。

ふと、なのはの視線が白衣についているネームプレートに止まった。

ネームプレートには彼女の名前である『美嶋玲香』と顔写真と供に書かれていた。

「……みしま、れいか？」

相手の名前を呟き違和感が生じた。  
どうして日本名なのだろう？ それに日本語で書かれているのは  
何故だろう？

次元世界で落とされたのだから、本来管理局に関連する病院に運  
ばれるはずだ。少なくとも、日本語が日常的に使われている世界  
第九十七管理外世界 に運ばれる理由がない。

「フロイライン。お話は出来るかな？」

それまで黙っていた片倉がなのはに問いかけた。

「片倉さん、まだ長時間の会話は無理です」

なのはの代わりに美嶋が応える。医者としてなのはを徒に疲労さ  
せる行為を看過することは出来ない。

「うん、だったら一つだけ質問させてくれるだけでいいよ。イエス  
だったら目を瞑って、ノーだったら目を瞑らないで」

それなら大丈夫だろうとでもいう風に片倉は美嶋にウィンクする。  
不承不承を隠しもせず、美嶋はまあいいでしょうとばかりに肯い  
た。

なのはは片倉に対して不信感を抱きながらも、片倉も白衣を着て  
いたので医者なのだろうと誤解する。

片倉はその誤解に気付きながらも都合がいいと意図的に訂正しな  
い。そして、いつも通りの楽し気な瞳で問いを発する。

「君は魔法使いかい？」

その問いに対してなのはは目蓋を静に閉じた。

\*

松代研究所／大隊用に割り当てられた区画の一角にその部屋は存在した。

松代研究所はその性格上地上部よりも地下部の施設のほうが、規模が大きく、その部屋もまた地下に存在した。

部屋の中央にはマホガニー製のワークデスクが鎮座し、その背後には窓がない代わりなのか空と海が前面に描かれた大きな絵が飾られている。

現在、そのデスクには持ち主であるところの片倉シロウがなのはの主治医という形になっている美嶋から提出された書類〓問診記録をまとめたレポートを嬉々とした様子で読み耽っていた。

丁度その時、ある報告の為結城が来たと副官からの連絡があり、すぐさま了承の返事を送った。

「失礼します」

さほど間をおかず、結城が入室した。

「やあ、二日ぶりだね。元気？」

「ええ、御蔭さまで」

大きな隈／疲労の色の濃い顔／汚れきった軍服〓今すぐ眠りの世界へと旅立ちたいという欲求。それを他者に感じさせない姿勢。

そんな結城に、思わず片倉は苦笑を浮かべてしまった。

「嘘は良くないよ。さっさと報告して寝たほうがいい。人間健康が一番だからね」

軽く笑いながら片倉は言った。

「それでは遠慮なく報告します。次期機械化重機動歩兵用主力兵装候補である第三世代型強化外骨格・仮称名称『カムラギ』、の評価試験全工程を終えました」

「うん、後で提出される報告書を楽しみにしてるよ。それでわざわざ来たんだ。君の所感を聞かせてくれるんだろ？」

「ええ、幾つか早急に対応していただきたい点があります」

「まあ初期不良は試作機に付き物だからね、さっさとブラッシュアップして実用機まで仕上げなきゃ」

そうして三十分ほどそのことについてのやり取りをした後、さも自然な素振りで結城にレポートを手渡した。

「丁度いいからさ、ちょっとそれに目を通してくれないかな」

「何ですか、これ？」

受け取り、ページを捲りながら訊ねる。

「うん、フロイラインのことが書いてあるね。大変興味深いよ」



結城はざつと目を通す。

N a m e ・高町なのは / S e x ・女 / A g e ・11 / B l o o d  
t y p e ・O      遺伝子上の差異をこちらの世界の住人との間  
では認められず、又、未知なる病原菌なども確認されず、防疫面か  
らいえば何等問題なし。

海鳴市や聖祥大付属小学校、実家であるという翠屋という名の喫  
茶店はもちろんのこと友人の家の月村やバニングスといった企業グ  
ループが存在しないことは確認されていた。

その点は特に疑問は浮かばない。あるはずもないのだ、世界が違  
うのだから。

なのだから、ここまでは良い。あの片倉が興味深いといったのは  
どの部分なのだろうか？

その答えは次のページに記載されていた。  
なるほど、これは確かに興味深い。一読し、思わず瞬時に納得す  
る内容だった。

「面白いでしょ？ 僕たちとは違う魔法を使うんだよ、それも随分  
と技術系統が違うね」

実にソソル内容だと思わないかい？

そう片倉の瞳には浮かんでいる。

ミッドチルダ式魔法及びベルカ式魔法。

デバイスという個人装備。

極めつけは幾つもの世界を管理しているという『管理局』という  
組織の存在。

「時空管理局ですか？　こんな組織が存在していたなんて、正直想像の埒外ですね」

「まあ、そうだろうね。でもね、どこかのお偉いさんが言ったじゃない『アリエナイというものがアリエナイ』ってね。どんな荒唐無稽に思えてもあるんだろうね、確実に。そしてあの子はそんな世界からこの世界に來たわけだ。……不幸だね」

「その点は同意です。ですが、戻る手段がない以上、彼女もいつかは決断せねば成らないと思います。それが早いか遅いかは別にして」

「分かっているよ、だから言ったんだよ。不幸だって。これはね、何もフロイラインに限った話じゃないよ。多分、いやきつとこの世界で生きているみな人類全員にとって大小の区別無く不幸なんだろうと思うてね」

「……そうですね。明日が来ることを何の疑問も無く信じていた時代は既に通り過ぎました」

「うん、君は詩人だね、知らなかったよ。まあようするに、幼年期が終ったってことでしょ」

「そうですね」

「だったら激動の青年期を乗り切ろうじゃないか。あの子の持つ力を使っても、ね」

そう言って、片倉はいつもと変わらぬ笑みを浮かべた。

＊

なのはが治療室の住人になり一ヶ月ほど経過した初春の日のこと。なのはの病室に一週間ほどぶりに副官を連れ片倉が訪れた。といつても副官自身は部屋の外で待機しているため、一度もなのはと顔を合わせたことはない。

「あ、片倉さん」

病室に入ってきた片倉に向かってなのはが言った。  
一週間ぶりではあるけれど、それまでは暇を見つければ頻繁になのはの見舞いに来ていたので既に二人は顔馴染みに成っている。

「久しぶり、何か不自由はなかったかい？」

開口一番にベッドの上なのはの向かいそう言った。  
既になのはは日常生活に不自由しないほど回復しており、むしろ運動不足を心配するほどだった。

「特にないです」

生活面で言えば本当に不満はなかった。まるで客人を歓待するような至れり尽くせりの対応にむしろ居心地が悪く感じることもさえあった。なのだから不満に思うのはある意味贅沢なことだとなのはは思っている。

それでも不自由に思うことはある。

飢えているのだ、情報に。

薄々というよりも、最早何かしら（なのは自身はロストログアが

関係しているのではないかと思っている）の原因により次元世界の何処かに飛ばされたのではないかと考えていた。そして、その世界は自分の出身世界である第九十七管理外世界に酷似しており、管理局が把握していない世界であるだろうことまでは推定できているのだけれど、第九十七管理外世界とはどれくらいの差異があるのかどうかが分からなかった。何せ、TVやPCと言ったものはおるか、新聞や雑誌といった情報媒体が周囲に存在しないからだった。そして、これは片倉の命令による意図的なものだった。

「うん、それは良かった」

にこやかに笑いかけ、片倉はベッドの傍らにある椅子に腰掛ける。

「ああ、これお土産。退屈してるだろうと思って本を持ってきたんだ。いいよ、本は。人類が生み出した文化の極み、なのかなあ？」

「疑問系で聞かれても……」

困り顔でそう言うと、片倉から土産だという本を受け取った。  
本の表紙に目をやった。

その本は『よくわかる歴史 近現代編』と書かれていた。

\*

『まずは、架空存在の出現と同時に勃発した今大戦においてその比類なき勇気を示し散っていった数多の将兵。そして今現在も死闘を続けているであろう将兵にたいして感謝の言葉を送りたい。

今世紀初頭。

我々、人類は科学技術の急速な発展に伴い、二十世紀という新たな世紀を光り輝くものだとすることを当然の様に認識し、盛大に祝福しました。その結果はご存知の通り、歴史上類を見ない規模で発展し、文字通り世界規模で展開した二度の世界大戦。その結果、人類自身の手で地球を滅ぼせるまでの破壊の力を手にいれてしまいました。

そう、核の炎です。

我々、人類はその恐るべき破壊力に戦慄し、そして相互不理解から始まった戦火を交えない新しい形態の戦争が始まりました。冷戦です。

一体誰が、予想しえましたか？

一体誰が、予見しえましたか？

一体誰が、予想しえましたか？

ある日を境に、鋼鉄のように強固で当たり前だとされ絶対的なものと思われた冷戦という構造そのものが雲散霧消に無くなるという事態を。そしてそれが、相互理解に基づく平和的なものでないことを。

当時　　といってもさして昔のことではありませんが　八十年代の人々は十九世紀終わりの頃の人々と同様に來るべき二十一世紀を光溢れるものだとして認識している人も少なくなかったに違いありません。　かく言う私もその一人でした。

私は宇宙人という存在を信じていない厳格な大人にとって、いささか眉を顰めるだろう趣味があります。そして同好の友人達と大いに語り合ったものです。尊敬すべきアーサー・C・クラーク氏やアイザック・アシモフ氏、ロバート・A・ハインライン氏らの諸作品に登場する雲にも届く高層ビル、そのビルの間を中空のチューブ状の道路が張り巡らされ、その中をタイヤの無い空を飛ぶ車が走り、宇宙空間では流線型で銀色の宇宙船が自由に行き交う……。そんなものが二十一世紀の到来と共に出現するのではないかと。勿論、そんなものは妄想であることは分かりきっていました。それでも想

像せずにはいられませんでした。何故なら、そこには少なくとも疫病や貧困、飢餓、そして戦争といった今まで人類を苦しめてきたものは存在しない幸せな世界だったからです。

私自身、そんな世界が到来することは無いだろう。そう思っていますし、事実それは真実なのでしょう。

ですが、二十一世紀といえば大変な未来のように思えた八十年代の初めごろ。その時代を生きた人々の中に、今のような状況に陥るなんて誰が予想できたでしょう？ もし、仮に予想できたとしても、当時の状況を考えればその人間は大変な夢想家であろうことは間違いないようもなく、また悲劇論者若しくは終末思想、或いはそれらの両方を持ち合わせているのだろうと思われるだけでした。

であるからに、誰がその者の発言を真に受けたでしょう？ この場合、大抵は一笑に付されてお終いです。運が悪ければ、精神病院に担ぎ込まれてしまうかもしれません。それほど今の状況は当時にしてみればバカバカしいまでに空想的なものであり、異常というしかないのです。

兆候さえなかったのです。ですから誰にも責任なんてものは欠片も無いことは明らかなのです。

青天の霹靂とさえ言うてよい八十年代の終わりに起きた事件。それから今現在も進行中のクライシス。

当時、私も含め八十年代と何の代わりもない九十年代が来ることを疑いもなく生きていた人々にそれを予期し予想し予見できなかったとしても何の罪も無く、今更責任を追及するぐらいなら間近に迫った脅威を如何にすべきかが問題であり、唯一無二の命題であることは疑いようありません。

そう自覚すべきなのです。

人類が崖っぷちまで追い詰められているということを！』

ての演説より一部抜粋。

国連におい

その序文から始まるこの本は二十世紀から始まる世界の歴史を分かりやすいように解説するといった内容だった。

その本を一心不乱という言葉通りになのはは読みふける。

元々好奇心が強い性質であつたから余計にここ一ヶ月ほどの情報欠乏が予想以上に堪えていた。だからこそ、乾燥したスポンジに水が染み込んでいくように吸収していった。

そして仮定は確信へとより強固に姿を変える。

ここはわたしが知っている世界ではない、ことを。

「どうだい、フロイラインのいた世界とは結構違つたろう？」

片倉は言った。なのはは声も無くただ肯いた。

なのは自身、まだ小学生ということもありあまり歴史を知っているわけではない。だけれど、第二次世界大戦で日本が連合国に負けることは知っていた。だけれど、この本にはそんなことは書いていなかった。日本は日英同盟に基づき、一個機動部隊を含む大規模な艦隊と数個軍規模という大規模な陸上戦力を遣欧軍として編成し欧州へ派遣していた。これは第一次世界大戦でも同様であり、多数の戦力を同じように派遣されており、当時最強の巡洋戦艦とされていた金剛級巡洋戦艦を中核して編成された艦隊はユトランド沖海戦においては壮絶な砲撃戦の末ドイツの巡洋戦艦を撃沈するという戦果も上げていた。

そしてそれ以上に驚くべき点があつた第二次世界大戦は日英対ドイツの間での戦争であり、そこにアメリカ（驚くべきことに南北戦争時の「ゲティスバーグの戦い」において北軍の敗北によってUSA（合衆国）とCSA（南部連合）という二つに分かれていた）は中立（合衆国はドイツ寄り、南部連合は日英同盟寄り）を貫いていた。

その結果、なのはの世界とでは世界地図が大幅に書き変わってお

り、欧州のほぼ半分の地域と欧州ロシアであるウラル山脈西の広大な土地がドイツ領であり北米大陸も三つに分かれていた（英領カナダ・合衆国・南部連合）。大陸もウラル山脈東に追い出されたソ連が満州地域と朝鮮半島、沿海州を版図としており、中国も奥地に追い込まれてはいたが共産党が存在し、日英の援助を受けている国民党もまた台湾（日本領特別自治区）に脱出するような事態にはなっておらず二つに分断されていた。

そんな世界で現在戦争が起こっていた。

世界規模の戦争だった。

国対国の戦争でもなければ、テロリスト相手の戦争ではなかった。それは種対種の、種族間戦争ともいえるもの。

正しく弱肉強食の闘争。

敵の名を『架空存在』と言った。

斜め読みではあるけれど、一読した。

シヨックがないといえば嘘になる。

それでも全くの出鱈目といえるほどの根拠は何一つなかった。そもそもなのは一人を騙すにしては大袈裟すぎる。

「片倉さん、これは本当のことなんですか？」

本を持つ手が小刻みに震えている、そのことになのは気付かない。

「うん、概ね事実だね」

ある程度なのは様子を予想していたのかあっさりと肯定する。

「大分驚いたようだね。まあこの場合、驚かないというほうが驚く



のかな？ まあいいけれど、フロイラインに来て欲しい場所があるんだ。勿論、今すぐには言っわけじゃない。明後日、そう明後日だ。来てくれるかな？」

なのは考える。

目の前の人物は何を考え、何を狙っているのかを。

幾つも考えが浮かび消えてゆく。その中に、これだと確信できるものはない。

情報不足なの。

そう結論付けると、なのは片倉の言葉を受け入れることにした。

「分かりました。明後日ですね」

虎穴に入らずんば虎児を得ず、そんな言葉が内心で浮かぶ。

「うん、ありがとう。じゃあ、明後日の十時頃にまたくるよ」

なのはの内心を知ってか知らずか、片倉はそう言って病室から出て行った。

その後ろ姿を見て、なのはは嵐みたいだな、とそう思った。

約束通り、片倉は副官と結城を連れなのは病室にやってきた。

「おはよう、気持ちのいい朝だねえ。こんな日はなんでも上手いきそうな気分になるね」

ただの気のせいかもしれないけれど言外に続け、いつもと同じように病室に入ってきた片倉はそう言った。ただ、いつもと違う点があった。副官と結城も一緒に病室に入室した点だ。

「おはようございます、片倉さん。あの、後ろの人たちは誰ですか？」

少しの困惑を表情に出し、なのはは訊ねる。

「うん、紹介しよう。僕の副官をしてくれている福田定一くんと我が大隊隊長補佐　まあ所謂副隊長みたいなものだね　の結城一郎太くんだよ」

「我が大隊？」

片倉の言葉の中で始めて聞くワード。思わずなのはは鸚鵡返しにつばやいていた。

「あれ？　言ってなかったっけ？　僕は独立機動群第501教導技術大隊を率いらせてもらっている大隊長。つまりは指揮官だね」

いけしゃあしゃあといつてのける片倉。副官も結城もある程度片倉のひとをくつたような性格を知っているので慣れてはいるが、初体験のなのはにとつてはただ驚くだけだった。

「お医者さんじゃなかったんですか!？」

「うん、僕は医者じゃあないね。あ、白衣を着ているから勘違いしたのかな？　きつとそうだね。うん、病院で白衣じゃ誰だって勘違いするね。ごめんね」

あっさりと自分の非を認めなのはに謝る片倉。その様子に副官と結城は内心白々しいと呆れるが、そんなことを知らないのはは素直に驚き質問する。

「だったらどうして白衣を着ているんですか？」

「うん、いい質問だね。ではお答えしよう」

そこで仰々しくごほんと咳払いをすると、

「　　僕が技術屋だからさ」

そう答えた。

研究所内エレベーター。

そこは荷物運搬用の役割があるのか、通常のものより格段に広い面積があった。

「もうすぐつくからね」

「はい」

四人では広すぎる中、なのははどこに連れて行かれるのか不安を隠せないでいた。

そんななのはの心情とは関係なくエレベーターは降下していく。程なく目的地に着いたのだろう音とともにドアが開いた。

片倉は後ろにひかれている結城と福田に視線をやり肯く／＼二人は同じように肯き返し、エレベーターからは降りる。だけれど、エレベーターホールからは出ずにその場に留まる。

なのははそれを不思議に思い、傍らの片倉の顔を見る。

「ああ、いいんだ。彼らは資格を持っていないんだよ」

なのはにとつて不可解なことを言った片倉はさあ行こうとばかりに歩きだす。なのはは数度振り返るとしようがなく片倉の後を追いつき始める。

エレベーターホールを抜け、程なくまるで戦艦の装甲版のような重厚で頑丈そうな扉の前についた。

「ここが目的地だよ」

片倉は笑みを浮かべる。

「帝国統合軍松代研究所最重要区画　通称・第零区画　本来なら存在しない区画であり、この存在を知るものは酷く少ない。またこの扉の向こう側を知っている者はそんな中でもさらに稀少だよ」

仰々しい仕草／賓客を迎える主人と言った風情。

「おめでとう。君は人類の天敵と対面する栄誉を与えられたんだ。これは喜んでいいことだよ？」

混乱しないといえはうそになる。

この人は言った、『人類の天敵』と。

その言葉に思いあたるものは一つしかない。

「架空存在……？」

呟きがもれる。

思えば混乱してばかりだった気がする。

なのは知らず知らずにレイジングハートを握り締めていた。それも強く。レイジングハートはそんな主を勇気付けるように光る。

重厚的な音を響かせ鋼鉄製の扉が観音開きに開いた。

それと同時に照明が一斉に灯る。

突然の光に目を瞬かせながらなのは室内を見る。

広大というしかない空間の中央にそれは鎮座してあった。それを一言で言えば水の入っていない巨大な水槽だった。

そしてその中にそれが居た。

傍目から見ればそれは獅子のように見える。だけれど現実の獅子に角はなく、鬣もまた銀色をしていない。また大きさも五メートルを超えるものは存在しないだろう。だったら、なのは目の前に存在するものの正体は一つだけ。

それが架空存在。

人類の天敵である。

松代研究所の一角／第二屋内演習場。

ちよっとした運動場ほどの広さのそこに現在、三つの人影が確認できる。

少女A　円條寺虎子。

手には三つのロリポップ／イチゴ・レモン・メロン。それぞれ交互に舐めながら待ち人を待つ。

少女B　叶野ツバサ。

ニコニコ笑顔／そらとお喋り　内容　如何に自分の弟妹たちが可愛いかについて。

少女C　芳野そら。

うんざりとした顔／ツバサとお喋り　既に一時間以上経過／終わる気配なく／無限ループといった感じ。

三者三様の様子で片倉たちを待つ。

虎子が不意に顔を出入り口である扉に向けた。

丁度扉は低い起動音を発し、開いた。

「やあ、待たせたね」

にこやかな笑みと共に片倉は言った。

そんな片倉に迫る影。

虎子はまるで虎が獲物に襲い掛かるかのような勢いで片倉に飛びつく。

「ドクドクドクドクドクドク！」

飛びつき顔を上げ片倉の顔を見ながら虎子は片倉の愛称を連呼する。

「あはは、元気だねこらちゃんは」

片倉はそう言って虎子の頭をひと撫ですると慣れた様子で虎子の脇に手を持ち上げ、そのまま下ろした。

「うん、元気なのはいいけど、今度からはもっと普通に挨拶しようね」

もう何回目か分からないほど繰り返される言葉／虎子はうんと素直に力強く肯く。

「すいませんっ！ 隊長。虎子には後で私がきちんと叱りますので……」

ツバサとの一方的なお喋りを中断し、急いでやってきたそらは見事な角度で頭を下げる。

「いいよ、何時ものことだしね」

そう言って片倉はそらの頭を撫でた。

「それよりね、今日は君たちに紹介したい子を連れてきたんだ。仲良くしてほしいな」

片倉は結城と福田の陰に隠れていたなのはを呼んだ。

「あーっ！」

なのはを見た虎子が驚きの声を上げる。

「あの子だ、あの子だ、あの子だよっ！」

そう言っつてツバサとそらの顔を見る。

「こたら、主語はちゃんといわなきゃわからないよ」

ツバサはそう虎子に注意しながらなのは顔を見る。

「あらあら」

ツバサも同じように驚きの声を上げた。

「二人とも初対面の相手に失礼です」

そらは二人の様子に文句をつけ、なのはに謝るため顔を向け、

「あなたは！」

同じように驚いた。

「あはは、やっぱり驚いたみたいだね」

片倉は三人の反応を見、笑いながら言った。

「うん、彼女はあの時君たちが助けた子で、名前は高町なのはちゃん。魔法使いだよ」

そついうと片倉はなのはの後ろに下がる。



「始めまして、高町なのはです！」

差し出す腕／それに答える腕は三つ。

「ボクは円條寺虎子、みんなはひらがな三つでこもらって呼ぶよ。よろしくね！」

元氣いっぱいで澁刺と。

「うちは叶野ツバサ、呼び方はツバサって呼ばれるのが多いかな。よろしくね」

柔和な笑みで柔らかく。

「私は芳野そら、ご自由にお呼びください。よろしくお願いします」

生真面目、だけれど冷たくはなく。

三人はなのはを受け入れる。

「はい。こもらちゃん、ツバサちゃん、そらちゃん。よろしく！  
それありがとう。本当ならもっと早くお礼を言いたかったんだけど」

そこで言葉を切るとなのはは片倉に視線を向ける。

「あはは、ごめんごめん。言い忘れていたんだよ」

頭を掻きながら片倉は四人に謝る。

それぞれの反応。

虎子 「ドクらしい！」

ツバサ 「あらあら」

そら 「気をつけてください」

なのは 「にはは……」

その後三十分ほど雑談（という名の質問会）を四人は楽しんでいた。

四人の姦しい雰囲気とは離れた一角。

「そろそろか、な」

人知れず片倉は呟く。

「隊長！」

丁度タイミングよく福田が呼ぶ声が耳朵を打つ。

「出勤要請が出ました！」

「うん、やっぱり北海道？」

現在、北海道にはホールが出現していた。

「ええ、その通りです」

「うん、それは結構。では戻ろつか、やらなきゃいけないことは沢山あるからね。忙しくなるよ、絶対に。ああ……、楽しみだ」

その表情はどこか歪にされど嬉しそうに笑っていた。

数時間後／輸送機内。

「これより任務内容の確認を行う」

結城は情報端末の液晶パネルに表示される情報を確認しながら説明する。

「ホールから顕現が確認された架空存在の規模は一個師団に相当する大規模なものであり、統合軍司令部は北海道に存在する戦力間の悪いことに第503大隊は大陸に派遣されている。だけでは架空存在の殲滅することが難しいと判断し、我が部隊の派遣が決定された。我が5011小隊の役割は孤立する友軍の救出及び残存する架空存在の殲滅である」

そこで北海道の書かれた地図をみせる。地図上には戦力が駒の形で置かれており現在の状況がどうなっているのか分かりやすくなっていた。

「何か質問はあるか？」

結城は三人を順繰りに見る。

「あの、わたしは何をすればいいんですか？」

何故自分がそこにいるのかいまいち理解できずに居るなのは質問する。

「うん、いい質問だね。実はね、フロイラインには見てもらいたいんだ」

片倉がこたえる。

なのはは何をとば質問しなかった。

「見てもらうだけでいい。何もフロイラインに血を流せとは言わない。そんな義務はないからね。ただ知ってもらいたいんだ。この世界がどうなっているか、を。それにはこれが一番手っ取り早いからね」

「わかりました」

なのはは肯いた。

\*

ちょっとした丘の上に彼等の部隊は展開していた。数日前までこの丘を支配していた樹木は自らの砲撃によりとつくの昔になぎ倒されている。

現在、彼等 機械化重機動歩兵一個中隊 の立てこもる塹壕はすでに三度目になる襲撃を受けていた。

これまでの襲撃によって部隊は二十パーセントを超えるほど損耗

し、そう遠くない未来に全滅の判定を受けるだろう三十パーセントラインを越えるだろう。激戦を物語るように塹壕に潜む全高2・5メートルほどの北崎重工製第二世代型強化外骨格『白銀』を装着している全員の迷彩塗装されていた装甲は退色しており、無傷であるところを探すほうが難しいほどに大小の傷を負っている。

彼等は塹壕に潜みながら前方を見詰めている。メインカメラからゴーグルへ投影される倍率を上げた前方の光景は荒涼と言っているほど荒れ果てていた。最早エーテルの粒子へと還元することの無い中小の架空存在や白銀の残骸、兵士の遺体が散乱し、ある種の現実感を喪失させるほどの生々しい情景であり、作り物めいた架空存在の残骸が何処かしら空虚にも感じる不可思議な光景を作り出している。丘の麓には初期の襲撃に置いて貴重な重砲の砲撃によって撃破した大型架空存在の残骸があった。そして現在丘の斜面にはバグ

小型架空存在に分類される虫型架空存在の群を確認する。その歩みは警戒しているのかさして早く無くゆつくりとしたものだが着実に近づいていた。そして、相対距離は千三百ほど。

一刻も早くトリガーを引き、弾幕を張り、火線を形成したかった。ただ鉄量のみがバグたちの前進を止められるのだ。

だが、それも禁止されていた。充分引きつけてから撃つように厳命されているからである。

何故なら、無駄弾を楽しむほどの余裕は無いからだ。

加賀武士はゴーグルに投影されているディスプレイの片隅に写る敵との距離を表す数字に気を止めながらも、バグに注意を向ける。

『ごつつい光景だなあ、ええ？ くそ分かっちゃいたけどよあ、無理があっただよクソツタレめ！』

レシーバー越しの戦友の言葉に加賀は苦笑する。加賀もその意見には全面的に賛成だが、あまりに率直なものいいだ。

流石に一個中隊で担当するには戦線は広すぎた。それでもここで

食い止めなければならない。それが命令であり、そうするだけの理由があつたからだ。

彼もそのことを充分すぎるほどわかっているからだろっそんなことを言いながらも寸分も気を緩めることはない。

『こいつはいい、視界一面敵ばかりだ！ 狙いをつける必要もないぐらいだぞ！ やってやれ！ 撃ちまくるんだ！』

距離が千を切った瞬間、待ちに待った命令が下る。

部隊長の声はある種の狂気に満ちていた。笑っているのだろっな、でも多分きつと目は寸毫も笑っていないのだろっな。顔を見ないでも分かる。きつと多分絶対。自分も同じような顔をしているのだろっからと彼は思った。

そしてレシーバー越しに耳朵を打つ部隊長の言葉は端的に目の前の光景を現していた。

それほどまでに彼の所属する部隊は敵に囲まれ孤立していた。

「畜生め畜生め……！」

何度と無く普段口にもしない言葉を彼が呟く。

その度に銃口から12・7mm AFE弾がばら撒かれ、小型架空存在に分類されるバグ達を粉碎する。

塹壕を掘り、充分とはいえないものの最低限の準備（最初期には砲兵中隊による支援砲火すらあつた）を整えたことによりここまで凌ぐことが出来たがそろそろ限界だった。手持ちの銃弾も底が見えてきたし、何より受ける圧力が時間と共に強くなっていき支えきるのは不可能なほど、どうしようもなく強くなっていた。

バグたちは生き残っている仲間には敬意をはらうが死者に対する敬意は無いらしく仲間達の屍を躊躇い無く越え、丘の頂上へと迫る。彼は唯一その前進を止めるための手段である銃弾をばら撒く。そ

れは熱病に浮かされたように一心不乱に撃ちまくった。

このままじゃ近い将来蹂躪されるだろう。死者や生者の区別無くその身は食われるだろう。

だからこそ、撃った。

ただただ撃った。

瞬間、側面から激音、次いで衝撃。転換、視界が赤く染まる。

疑問。視線を向けた。

それまで隣で同じようにトリガーを引き続けていた戦友の上半身が複合装甲を張られた白銀ごとダイヤモンド以上のモース硬度を誇る棘に貫かれていた。それは貫くというよりも生えたという表現が似つかわしい光景だった。

「  
」

声にならない絶叫。

更にトリガーにかかる指に更に力が籠る。

銃口から寸断無く放たれる弾丸。

加速度的に消耗してゆく弾丸。

それを省みることなく撃ちまくる。

思考 停止。

ただ我武者羅に遮二無二、撃ちまくり、決められた終局へと加速する。

トリガーを引く 発射の衝撃なし 残弾ゼロ。よって弾丸が発

射されることは無く、機能は停止。今やその役割を変え、ただの鉄

棒へと化す重機関銃。

思考は単純。

バグを殺す。

生き延びる。

その手段。

単純明快、投擲。それを可能にするのが、強化外骨格の擁する倍

力装置によって強化された己が筋力。

野球ボールのように簡単に投擲された銃は迫り来る二匹のバグも  
るとも四散。

それでも大勢に影響なし。

既に部隊の有する火器は底をついていた。残っているのはハンド  
ガン程度の火力。お守り程度にはなるが実用度はほぼゼロ。外皮を  
貫くにも威力が弱すぎる。

そして今更退却できるはずも無く、全員それを理解している。

抵抗する手段は？

すぐに部隊長がそれを命じる。

高周波ブレードアックスの起動〓対架空存在近接戦闘の命令。

それしかなかった。今更解困戦闘を行い撤退できるなど誰も思っ  
てやしないし、それしかないことも分かっている。

一言も無く、生存している全員が速やかに高周波ブレードアッ  
クの起動。

起動を確認し持ち構えたとき、

『フン、奴ら悠々と前進してきやがる、まるで遠足にでも来ている  
みたいに、な。奴ら、きつともう勝ったつもりでいるんだぜ。もし  
かしたらよだれもたらしているかもしれん、まったく行儀の悪い奴  
等だ』

どうやら生き残ったらしい一人がそう話しかけてきた。もしかし  
たらただの呟きかもしれないと思いながら、

「だったらやることなんか決まってるじゃないか！ 人間様がどれ  
だけ恐いかってことを教育してやるんだ、行儀よくな！」

加賀は恐怖を隠しそう応える。そいつはいいなとばかりに同意す  
るかのような低い笑い声が耳をうった。それも複数。低く、喉を



鳴らすような声だった。

それが強がりなのは誰の目からも明らかだった。だけれど、最早ここにいたっては出来ることなどこのぐらいしかなかった。毛頭、出来ることなんて幾らも無い。

低い振動音を発する刃。

銃から戦斧へ獲物を代え、敵と対峙する。

中世の鎧騎士を思わせる機甲猟兵の隊列／数百年前の聖地における十字軍のような情景。

だが相對するのは異教徒ではなく架空存在という名の異種生物群。但し、彼等が信仰している神の敵と言う意味に置いてはどちらも同じではあったが。

障害の無くなった道をバグたちは悠々と前進する。ゆっくりとだけれど着実に。そして、その距離は約百メートルにまで近づいていた。

逸る鼓動／奥歯を噛み締める／冷静になれと呟く／それと反比例して鼓動がより早くなる。

額を流れる汗が瞳に入った。数瞬、目を瞬かせる。

その間、一秒に満たぬ間に事態は劇的に変化した。

そう彼等は助かったのだ。

天から降り注いだ光の柱。

それが認識した全て。

天上からの一撃は、神罰という名の神の鉄槌を思わせた。

そしてその柱は一つではなかった。

四方を取り囲むように展開しているバグたちの頭上に降り注いでいる。

全てを粉微塵に変える重砲の援護射撃のような情景。  
声にならない。

呆然とブレードアックスを握り締めながら立ち尽くす重機動歩兵たち。

我が身に降りかかった事態を理解してはいないようで、彼を含め部隊の生存者は皆呆氣に取られている。

そんな彼等の元に声が響く。

幼い声。

「大丈夫ですかー？」

声に反応して空を見上げた。

数十メートル上空には自分の半分も生きていないような少女たちがいた。

少女は何かしか喋っているようだが上空に吹く風が強いせいなのかうまく聞き取れない。集音装置なんて便利なものは白銀に搭載されておらず、今後もその予定はないだろう。

戸惑いを感じながらもその心配そうな表情から何を言っているのか臆氣に理解した者は片腕を上げ、又は振り、自分は大丈夫であることを伝える。

「それなら良かったです！」

ほっとしたような、そんな微笑を浮かべた少女は軽く手を振りながら蒼空へと消えていく、まるで幻かのような呆気なさ。

生き残りの重機動歩兵たちはいまだ何が起きたのか確りと理解できた者はいなかった。それでも噂程度には聞いたことがあった。馬鹿げた話だと思っていた。

曰く、統合軍には魔法少女がいる、と。

場面はいまだ戦場に魔法少女が姿を現す前に遡る。  
輸送機内。

四人の少女の眼前に巨大なコンテナが置かれていた。

「？」

四人が四人とも『？』マークを顔に浮かべそのコンテナを見上げている。

片倉はコンテナを開けるように指示を出しながら四人に近寄った。  
そしてコンテナが開けられる。

コンテナの中央に鎮座する確かな存在感を持つ鋼鉄の鉄塊。

「うわぁ」

コンテナの中身を見て虎子となのはは思わず声を上げた。

「……凄い」

ツバサは自覚のない喜色を表情に出した。

「大隊長殿。これは何でありますか？」

そらは生来の生真面目さで片倉に質問する。

片倉は良くぞ聞いてくれたとばかりに嬉々として喋りだす。

「これはね、今回の目玉である試製59式75mm魔力砲っていつ

て、フロイラインに聞いた情報をヒントにして改良した新方式の魔力砲だよ。机上の計算ではあるけれど今までより効率的に魔力を収束させ撃ち出せるようになったんだ。勿論、魔力量を増加させてね」

そこで片倉は視線をツバサに向けた。

「そしてこれをツバサちゃんに使ってもらいたいんだ。何せ我が小隊一の砲撃手だからね」

ツバサは視線を大砲に向けたまま、

「……喜んで」

陶醉感を含んだ年齢に似合わぬ艶のあるつつとりとした声でそう応えた。

「うん、ありがとう」

そこで片倉は体ごとそらの方へ向ける。

「それでね、実はこれの運用にそらちゃんも手伝ってほしいんだよ」

「はい、どういふことでしょうか？」

「うん、それはね。そらちゃんには魔力を提供して欲しいんだよ。こういってはあれだけど、つまりは 燃料タンクだよね」

「わかりました」

そらは素直に応じた。片倉は必要でもないことはしないしやらせはしない、それこそ絶対に。だからこそ、自分の役割は必要なのだろう。それが自分に出来ることならば否はないし、もとより拒否する権利も権限も自分にはない、そういう思考の末の返答。そらは片倉を信用していた。

そうして、戦場に着くぎりぎりまで調整を続け、出撃直前に調整は終わった。

「よしこれで終わりっと！」

整備員に混じり、工具片手に自ら調整をしていた片倉が調整の終わりを告げる。

「間に合ったね。これでいつでもいけるよ」

「「「はい！」「」」

三人が元気良く返事をした。

「うん、いい返事だね。じゃあ転送を許可、速やかに装備を整え出撃せよ。あゝ、復唱は要らないよ。後は結城君に任せるね」

片倉は実線指揮担当である結城に譲ると一歩引いた位置に移動する。

変わって前に出た結城は、

「各員速やかに実行せよ、力カレ！」

命令した。

「『『変身!』』」

三種の重なる声。

その言葉をキーとし三人の個人専用兵装の転送を戦術サーバー賢人に要請され、速やかに受理された。そして、受理されるのとはほぼ同時に三人の頭上に直径メートルほどの魔方陣が二つ現れ、ゆつくりと下りてくる。そして、その魔方陣が通過していき、それまで着ていた格好から精神感应金属と炭素繊維で編まれた黒色のアンダースーツ、そして各自の適性にあつた専用のM M J A（マジック・マテリアル・ジャケット・アーマー）へと変化していった。

M M J A 最新の材料工学と錬金術と呼ばれる技術の粋を凝らして作られたコスト度外視の、耐衝撃、耐熱、耐弾など考えられる限りにおいて当代最高であり最優・最良の性能を有したヒビロガネと呼ばれる素材で作成されていた。そしてM M J Aの一番の特徴は魔力回路マジックサーキットと呼ばれる存在である。

魔力回路はその名の通りの作用をする機構であり、効率よく全身に魔力を行渡らせるように計算されていた。また、全身に行渡る魔力の作用で基礎身体能力や防御力などを格段にあげていた。

虎子 イメージカラーは紅/肘・膝まで覆う大型の手甲・具足/肘先から伸びる魔力&液体金属の放出口/背に角度差を設けて装備された二対八組計十六枚の大型空間戦闘用姿勢制御翼/要所要所に装甲を纏う超近接戦闘仕様/隊内一の突撃魔〓拳骨魔にして切り裂き魔〓小隊前衛担当。

ツバサ イメージカラーは黄/頭部に装備されるヘッドセット〓振動探査・熱探査・赤外線探査・超音波探査などの機能を集中・背にはヘッドセットとリンクしている光学スコープ・外部独立演算

装置・各種センサー搭載バックパックを装備／武装・20mmガトリングガン&12.7mm対物狙撃銃／掃射射撃及び精密狙撃が可能〓掃射兵にして狙撃兵〓小隊後衛担当。

そら イメージカラーは蒼／バランスの取れた装備／銃（二つの銃口〓二種類の弾丸・魔力弾と質量弾を使用可能）×2／剣（魔力刃形成機構付高周波ブレード〓単独及び銃剣としても使用可能）×2／全身に空間戦闘用姿勢制御翼及びエーテル放出口〓高機動空間戦闘用兵装／万能なるオールラウンダー〓指揮官にして遊撃兵〓小隊中衛担当。

「どうだい？ 我が魔法少女たちは。中々どうして、こつ……カッコイだろう？」

いつの間にかなのは隣のやってきていた片倉はまるでお気に入りのおもちゃを自慢する子供のような感じでなのはに話しかける。

「はい、カッコイです」

なのはは三人の姿をまじまじと見、素直に感想の言葉を口にした。自分のバリアジャケットとはぜんぜん違う。だけど、確かにこれも魔法なんだ。

『後部ハッチ開放 5011小隊・出撃せよ』

なのはがそう思ったとき、スピーカーが鳴り響いた。ほぼ同時にハッチが開放され強烈な風にあおられる。

「ゴゴゴゴ！」

結城が三人に向かって風音に負けぬように怒鳴る。

「なのは、ドク！ 往つて来るねっ！」

虎子がなのはの傍らを通り過ぎるときに言った言葉／その横顔は凛々しく、

「ゆつくり見物してください」

ツバサがなのはの傍らを通り過ぎるときに言った言葉／その横顔は笑顔で、

「では往つてきます」

そらがなのはの傍らを通り過ぎるときに言った言葉／その横顔は格好良かった。

\*

そして場面は戦場の空に戻る。

原生林が残る北海道の大地。

地を轟くは虫型架空存在の集団／迎え撃つ重機動歩兵中隊。危機的状況。

受ける損害は加速度的に悪化。



「もう駄目だ！」

兵士が恐慌一步手前の精神状態で重機関銃を撃ちまくり少しでも架空存在の進行を食い止めようとする。

「うるせえ！ 馬鹿野郎！」

隣の下士官がそんな兵士を叱咤する。

「もう架空存在の相手なんかイヤだっ！ もう限界だっ！ 誰も彼も俺たちを見捨ててやがったんだっ！」

「何いつてんだお前は。どこにも行けねえし、どこにも行かさねえぞ」

「俺は帰る！ もういやなんだ！」

「どこに行く気だ？ おまえの墓穴はここだぞ。それで墓標にはこう書くんだ。『すぐくカツコイイ第七師団重機動歩兵第二十六連隊第二大隊第一中隊が、あの糞つたれな架空存在どもをやっつけて、すぐく格好良くここに眠る』ってな。だが、おまえのせいで変わっちゃまう。変わっちゃまうんだよ。おまえがメソメソしてるから『ヘタレの根性無し、架空存在どもにおびえ震えながら泣きながら眠る』ってな。そんなの冗談じゃねえぞ、冗談じゃねえ。おまえには無理矢理にでもカツコイ良く死んでもらうぞ！ 守りたい奴が居るって言っただろ？ だからこんな馬鹿げた機械の鎧を着込んでるんだろ？ だったら望み通り一匹でも多くの架空存在を道連れにして死ねやー！」

「糞……ッ、くそオ、畜生、畜生、畜生！」

涙声をにじませ、強化外骨格の中の全身が震えていた。

「それにな、まだ死ぬときまったワケじゃねえ。俺達や防衛線の時間稼ぎだ。ホレ！！ さっさと持ち場に着くんだよ！！ 統合軍がこの状況を直ぐにひっくり返すさ」

その言葉の直後／高度500メートル上空。

重量一トンを超える武骨な鉄塊を構える二人の少女。

試製59式75mm魔力砲は、ツバサやそら自身が持つ固有の魔力以外に、装薬の代わりに魔力を高濃度に圧縮し、封印したカートリッジを使用する。これはなのはの話に出ていたカートリッジシステム及び実際に提供されたカートリッジを研究解析し試作したものである。元々カートリッジシステム自体の概念はあり、研究もされていたため実物の提供により約一ヶ月の短期間における開発が可能だった。そして、カートリッジにより瞬発的火力の増大に成功した。これは収束型魔法よりも効率よく自分以外の魔力を使用することが出来る反面、射耗度が大きすぎ、砲身自体が数発しかもたないという問題点があるが、それでも火力とは結局のところ如何に多くの鉄量（この場合魔力）を短時間で目標に叩き込められるかということであり、統合軍技術局第九部はあえてその問題点を、砲身を消耗品と割り切ることを目を瞑り、一つの答えとして出されたのが、この試製59式75mm魔力砲である。

「マジック・カートリッジ、ロード」

カートリッジが勢いよく装填される。

「そら。手荒く狙うよ」

自然に頬は歪み笑みを浮かべる。それに気づかないのは本人のみ。

「うん、ツバサなら大丈夫」

相変わらずね、と内心で思いつつそらは言った。

そらは自分の魔力回路と魔力砲をケーブルで繋げ予備魔力を送る。砲手であるところのツバサは眼下に蠢く架空存在の群の中でも一頭抜きんでている中型架空存在にすべての探査能力を総動員し標準を定める。

魔力砲による精密射撃／それを可能にするツバサの能力。

「カウントスタート……」

ツバサが呟く。

「3・2・1」

刹那の間。

「ファイエルっ！」

自身の言葉を合図にトリガーを引いた。それと同時に、反動を相殺させるためのバックブラストが背後に放出された。

瞬間、役割を果たしたカートリッジが排出される。

同時に砲口からはその身長以上の大きさの光線が一条、標的としていた中型架空存在に向かい発射された。大気を震わせ、切り裂きながら一条の光線が軌跡を描き、疾走する。

通常の物理弾と違い、魔力弾はH E A T弾とほぼ同じ効果によりモノを破壊する。勿論、運動エネルギーによる衝撃によっても破壊

することは可能ではあるが、基本的には熱量で相手を融解させ、貫通させる。この場合も、鋼鉄の硬度を誇る虫型架空存在の外殻を融解し貫通させた。

「そら、第二射いくよ」

嬉々／鬼気とした表情を浮かべツバサは言った。

「う、うん……」

正直、少し引き気味のそらはそう応じた。

「次は拡散型いくよ」

嬉しそうにカートリッジをロードするツバサ。

その姿は正しくトリガーハッピーのそれであった。

今や戦闘は終結し、バグたちの累々とした屍が築き上げられ、いまだ存在を確定されていなかった架空存在の死体がエーテルの粒子に姿を変えて世界に溶けていく。

生き残った兵士たちはほぼ全員があっけに取られたような様子で空の一点をただ見上げていた。

その視線の先には三人の魔法少女が居た。

「うわあ、スゴイ、スゴイ、スゴイ！」

虎子はそらとツバサによってなされた砲撃の威力に歓声を上げる。虎子の後方／試製59式75mm魔力砲を構える二人。

「うん、博士が太鼓判を押すだけはあるみたい」

ツバサの感想      役割は砲撃手／自覚なきトリガーハッピー。

「……流石に砲身の射耗が激しいですね」

その感想      役割は単純明解魔力供給／とどのつまりは燃料タンク。

その言葉通り砲身はこれ以上の砲撃が無理なほど射耗していた。

「転送」

ツバサは試製59式75mm魔力砲を転送、入れ替わりに本来の武装である20mmガトリングガンが送られてくる。

「二人とも準備はいい？」

先ほどの砲撃を見て、いてもたっても居られなくなった虎子がいまかといったように言った。

「大丈夫」

二人は肯定し、うなづく／大隊本部からの無線の指示。  
架空存在の局地的な攻勢／その阻止・撃滅。  
そして三人は新たな戦場へと向かった。

\*

戦場後方／仮設大隊本部／連結された車両内。

薄暗い車内を埋め尽くす様々な機械群／機器から発せられる種々の光源／種々の光に色づく車内／さながら宝石で彩られた玉座のような車内。

「いやあ、やつぱり飛鳥はおつきいねえ、それに早いし楽チンだったね。流石は飛鳥の往けない空は無しと謳われてないね」

そんな玉座の主であるところの片倉はここまで来るのに使用した戦術用戦略爆撃機『飛鳥』（言葉遊び的に矛盾した存在である）の輸送機タイプの感想を口にしつつ、何かを心待ちにしている様子で足を組み椅子に座っていた。

「大隊長！ 戦術サーバー 賢人 及び戦略偵察衛星 センジユとの接続を確認。並びに専任調律官から統合情報処理システム『グラムサイト』の使用許可の要請が来ています」

情報仕官からの報告に片倉は、

「うん、承認！」

笑みをもって返答をする。

片倉は上機嫌で椅子に座りながらコンソールを踊るような指先で操る。

次々にディスプレイに投影される情報処理され優先順位が決められカテゴリされていく膨大というしかない数の情報及び関連資料／秒を刻むたびに次々に更新及び追加されていく。

処理されてもなお膨大と言う他ない情報群の中からある一つの情報及び資料に激しく動いていた視線が止まる。

「ん？ んんんん……うん。なるほど、ね。賢人ちゃんもあの子も  
そう判断するんだ。もとよりそのつもりだったけど決まりだね。  
四人目は彼女だ」

片倉シロウは 頬を歪め、一人の少女の背を見つめた。

見つめられている少女「高町なのははその視線に気づくことなく、  
ただまだ一心に画面を注視していた。まるで祈るようにすら見えた。  
画面上では今この瞬間も三人が架空存在相手に戦っている。

それは先ほどのように一方的なものではなかった。

確かに個々の力でいえば戦場で確認されている小型や中型の架空  
存在よりも強いのは確かだ。だけれど、架空存在の真の恐ろしさは  
その数にこそある。確かに、彼女たちは強い。だけれどいつまでも  
戦い続けられるわけでもない。何時かは落とされる。だからこそ集  
団というのはそれだけで脅威なのだ。

「隊長！ 大規模な次元振動を感知、同時にエーテル反応値上昇！」

情報士官が声を張り上げた。

それとほぼ同時に画面上の映像も急激に変化していた。

\*

「いつけえええええええっ！」

背部の十六枚の翼からエーテル粒子が放出され爆発的な加速を生  
み出す。そして赤く焼ける燐光の右腕を勢いよく突き出し一転突撃  
を仕掛ける。

単純なる機動〓容易なる迎撃。

それをさせず、突撃を援護すべきツバサの攻撃。

鋼鉄の驟雨／呵責なき苛烈な掃射。

次々に架空存在は被弾し迎撃のための動作を潰していく。

そして、虎子は架空存在の群れに突撃し、縦横無尽に暴れまわる。エーテル粒子を纏い真紅に染まる拳が外殻を貫き、架空存在を二匹まとめて吹き飛ばし、肘先から伸びる液体金属＋魔力による複合刃によって架空存在の防性フィールドごと切り裂く。

縦横無尽に暴れまわる虎子／一騎当千を絵に描いたような存在。

二十三匹目の架空存在の頭部を粉碎し、次の獲物に狙いを定め移動使用とした瞬間、虎子は不意に立ち止まり空を見上げてた。それは第六感と呼ぶべき感覚。虎子はそれを疑ったりはしない。

「こら！」

そらとツバサが虎子の傍らに降り立つ。

「そらにツバサ。くるね、間違いなく。ボク、ドキドキするよ」

虎子は二人に顔を向けることなく、ただただ嬉々とした表情で空中の見るものを不安にさせる底のないホールを見上げていた。

「まったく……」

二人ともどうしてこうなのだろう、かとそらは内心において本気でため息を吐いた。

そうしている間にも事態は急激に変化していった。

そして　ホール周辺の空間に激震が走り、黒い孔から大気が怯えるような咆哮が轟き、爬虫類のような鱗がびっしりと生えた腕が突き出、次の瞬間には全身を現した。



それは大型架空存在だった。神話に出てくるドラゴンのような形態を持つそれは、これまで三人が仕留めた架空存在よりも遥かに強大だった。

「カテゴリパターン・レッド！ 竜種ですっ！」

怒声にも似た大音声が響いた。

その一言で車内は一種の騒乱が沸き起こり次いで混乱状態に陥った。

竜種 数多存在する架空存在の中でも最強種に位置する種族。

今まで確認された竜種は小型・中型・大型の区別なく、そのどれもが強大な力を有し、大型にいたっては最低でもその存在は一個師団に相当するとさえ言われていた。

だからこそ、車内は狂乱と一步手前の状態までいく。誰もが理解している。この場にあれを相手取るだけの戦力はないことを。

そのとき『バン！』という一際甲高い音が響き渡った。

車内に居た人間は思わず音のした方へ視線を向けた。

集中する視線／立ち上がった片倉は周囲を見回した後、

「はい、はい、混乱するのは勝手だけど、その前にお仕事しちゃうよ。その後なら好きなだけ泣き叫ぼうが神に祈ろうがしていいから、さ。だって僕たちは大人だよ？ 子供が血を流して戦っているのにどうして僕たちが彼女たちの背の後ろで怯えて震えて隠れていなきゃいけないんだい？ 君たちはそんな恥知らずな臆病者なのかい？ 違っただろ？ 違っはすだろう？ 少なくとも僕は君たちがそんな弱虫とは違っと思っているよ。信仰しているって言うてもいいね、君たちは義務と責任の何たるかを理解している大人なんだ。つて、ね」

視線を意に介さず、片倉は数度手を叩くと、穏やかな声音で諭す

ようにそう言った。その瞳は真摯で、その言葉を欠片も疑っていないのがハッキリと自覚させられる。

「……………っ」

数瞬前まで怒号で満ちていた車内が一転して水を打ったような静寂に支配されていた。

そして次の瞬間には　。

「…………おい、何してる！　情報処理の手を休めるな！　生物なんだ。美味いうちに料理しなきゃいけないだろう　」

「優先順位の大幅な変更に伴い、戦場管制官はそれの対処を　」

「MMJA-L02の準備を早くしろ。あんなデカブツが出てきたんだこつちもそのくらい振舞うことになるんだろうからな。それと　」

等々。

先ほどとは意味合いの違う怒号が車内を飛び交い、片倉は先ほどのような笑みを浮かべると椅子に座る。

「お見事です」

結城が傍らに来、言った。

「世辞は良いし、柄じゃないでしょ？　予想はつくけど本題は何？　時は金なのかもしれないけれど金で時は買えないよ」

振り向かずに視線は画面を泳がせたまま、手は舞踏の如く動かす。

「限定解除の要請です」

「第二？」

「ええ、今のところは」

「うん、いいね。好みだよ。素晴らしいね」

上官の言葉は結城の予想通りのものだった。

「だけど、ダメ。ダメなんだ」

次の言葉が続くまでは、

「何故です！？」

結城は思わず声を荒げる。

「まだ市ヶ谷の許可が出てない。僕の権限で許可すると後々問題になるからね。だけどみすみす上層部の無理解という奴によって彼女たちを危機にあわせるのは嫌だね。最悪って言うてもいい。だから十分だけ待つてほしい。そう十分だ。この時間が如何に長いのかは理解しているつもりだけど、あえて命令する。5011小隊は敵性大型架空存在を拘束留置せよ。これにたいし大隊残存兵力は可能な限り支援すること。これは最優先命令である」

そこで漸く片倉は結城に振り返り、

「復唱は要らない。さっさと行動に移して」

「アイ、サー」

結城は敬礼し、すぐに退車する。

道中、結城は予備兵力の突入を勘案する。問題はタイミングだ。出来ることなら最高のタイミングで横つ面を殴り飛ばしたい。それに必要なものは？

「一撃離脱が可能な機動性があり、それと同時に多重防性フィールドを貫きダメージを与えられるだけの威力を持つ　何か、か」

大型トレーラーが五台ほど集まっている前で立ち止まる。

「これが、これしかないか」

その二つをクリアできる可能性のある存在は結城の知るところ唯一つ。

文字通りの隠し球とさえ言える存在。

結城に躊躇いはなく。既に許可は出ている。

「ならば後は決断するだけ」

そして結城は視線をそれにまつすぐに定め、その場に居た整備員たちにその稼働準備を命じた。

元々いつでも出撃できるように戦闘待機をしていたのだろう、驚くほどのスピードで諸々の作業が進行していく。

「よーし、立ち上がるぞー離れろー！」

班長のしゃがれた声が周囲に響く。

その声を合図にそれから離れていく整備員。

ズシンという音／それによって舞い起こる土煙。

巨大な人型のシルエット／鋼の武神に相応しい威圧感。

すでに数え切れぬほど見ているというのに合いも変わらず感嘆の念を抱く。

「仮称名称『カムラギ』。世界初の第三世代型強化外骨格、か」

それこそがこの場に存在する唯一の答えだった。

第二世代までの強化外骨格が従来のパワードスーツの延長線上に存在するのだとすれば第三世代のカムラギとはパワードスーツとは一線を隔てる存在　全高6メートルほどのロボット　だった。

動力源にスフィアキューブ（電流を流すことにより高速で回転する特性を持つ物質）と呼ばれる物質をエネルギー源にすることにより従来の古代燃料や電気などといったものを動力源にした動力機関では不可能なほどの高出力を可能にした（これに匹敵凌駕するのは理論上で存在する超小型融合炉のみである）。また従来の強化外骨格で一応の完成を見ている人口筋肉をパッケージ化することにより整備の簡易化、量産の容易化に成功していた。

他にも試作機ゆえの新機軸な先行技術が随所に盛り込まれており、お世辞を言っても稼働率がいいとは言えない。むしろ、稼働率など端から考慮にしていない理論実験機とさえ言える存在。故に一個小隊にも劣る分隊規模の四機編制のみ大隊に存在し今回の緊急出動もあわよくば実戦を経験させる良き機会だと捉えた何者（そんなこと可能な者は容易に見当がつくが）かが分隊の半分である二機をこの戦場に先行して送り込んでいた。

「可能か否かを聞いている。可能か？」

結城の目の前に居る三十台半ばに見える人物／カムラギ用に調節された従来の物より対G性能を向上させた特製のパイロットスーツ／斑な無精髭／日に焼けた精悍な顔〓独立機動群第501教導技術大隊実験重機動歩兵小隊所属坂井純一朗中尉。

「やりたいかどうかで言えば正直やりたくはないですね。ですが可能かどうかを言われればやってみせますとしかいえません」

職業軍人ですからという表情／結城の説明を聞いたうえでの返答／それに同じような表情を浮かべ、疑問を持たない僚機のパイロット。

「よろしい。ならば貴様たちに命令する。現時刻を持って5011小隊にたいし可能な限りの支援を行うこと。これにはあらゆる手段が許容される」

「あらゆる手段ですか？」

「ああ、そうだと思う存分やってくれ」

「それはえらく景気が良いですね。分かりました実験重機動歩兵小隊派遣分隊はこの時点を持って状況に移ります」

そして振り返ると、

「弾代は全部隊長持ちだ！ 遠慮なくたらふく食ってやろうぜ！」

背後に勢揃いしていた整備員に向かって怒鳴った。

『アイ、アイ、サーっ！』

歓声が沸き上るそれを背後にし結城は燃え上がる空を見上げた。  
あの空の下で自分の半分にも満たない年齢の少女たちが戦っている。今もこの瞬間も傷つき血を流し、それでも尚戦っている。

だからこそ本来ここまで来る必要はない。それでもここまでわざわざやってきた。そっちのほうがいからという理由があるがそれよりもさらに。

「罪悪感？ いいやそんなものを思っでは彼女たちに失礼だ。

今は出来るだけのことを可能な限り早く。それだけが彼女たちに対するせめてもの行いだ」

結城は最早、空に視線を向けることなく歩きだす。その歩みは力強かった。

\*

大型架空存在    それも竜種（！）    の出現に虎子を除く二人は一時的な混乱の極みにあった。

それでも、二人はすぐさま態勢を整える。混乱するということが戦場で一番やってはいけないことだと、そう何度も教え込まれている。そして何より、戦場ではあり得ない様な事があり得るという現実。それを実戦経験から充分に学び取っていた。

そらは混乱から脱すると、すぐさま魔力弾を二丁の銃より放つ。



チャージしていない為、それほどの威力ではないが、牽制するには十分な威力がある。魔力弾は、寸分違わず架空存在に命中したが、七重にもわたる防性フィールドに阻まれその外皮には傷一つついていない。

架空存在が持つ、爬虫類特有の瞳がぎょろりとそらを睨んだ。

睨まれた瞬間、ゾクリとそらの背筋を悪寒が走る。危機回避能力でも言うのだろうか、本能から来るそれをそらは疑わない。すぐさま行動に移す。

一瞬遅れ、架空存在の頬が膨らみ、次いで巨大な火炎球をそら目掛け吐き出した。それは弾丸よりも速く、そらへと大気を焼きながら疾走する。

正に紙一重の差で三人は散開し回避した。そして火炎球は虚しく地面を抉り、四散する。その痕は雑草一本残さず消え果て、ガラス上に地面を溶かし、クレーターのように陥没していた。

その様は焦土のそれである。幾ら、防性フィールドを張りMMJ Aの装甲が硬くとも防ぎきれぬモノではない。

「くらうわけにはいかないですね……」

その威力に慄然としながらも、そらは銃に銃剣 魔力刃形成機構付高周波ブレード を着剣、その出力をあげ1.5mほどの魔力刃を形成させる。そらの心はいまだ欠片も挫けず、戦意は旺盛だった。

そらを標的とした二撃目を放とうと、架空存在が口を閉じ、頬を膨らました その瞬間。

数えるのもバカらしいほどの数の20mm ATE弾が頭上から降り注ぐ。AFE弾は架空存在に次々に着弾していき防性フィールドを一枚ずつ貫通していきながらその威力を減失していく。それでも雨霰と降り注ぐ鋼鉄の驟雨は威力の不足を数で補って余りあった。そして、次の瞬間には架空存在の頭部から激しい誘爆が起きる。

「チャージなんてさせない！」

後方、ツバサによる援護射撃。

「うおおおおおおっ！」

その隙を突き虎子は突撃を仕掛ける。そらはその援護をする為その後が続いた。

エーテルの赤い残滓の軌跡を描き、いまだ黒煙燻る竜種へとただただ虎子は突撃する。瞬く間に縮まる距離。イケルと思った直後、身体が勝手に回避行動へ移っていた。

「えっ！？」

自らの行動に対して驚きの声を上げた直後、その眼前を掠める複数の影。竜種の背から現れる器官/そのまま進んでいれば串刺しになっていただろう一本一本意思を持っているかのように動く触手/槍のように鋭利な先端。

「触手？」

背後、まるで要人に付き従う警護のように虎子の背後にいたそらはそう呟きながら自らに迫るそれを二本の刃で切り裂く。

「やっかいですね……」

複数の触手を相手取り、まるで舞踏のように相手取りながらもそらは思考を続ける。それを可能にする分割並列思考というそら独自の思考法。

ツバサに援護を求めようとしたとき、

「そら、ごめん。バグたちが！」

ツバサからの無線が入る。BGMに途切れなく銃声がこだましていた。視線を一瞬だけそちらのほうへ向け、それとほぼ同時に戦況状況を 賢人 に確認。直ぐに状況を把握。

残っていた架空存在が一塊になりツバサに襲い掛かっていた。幸いにもツバサ独りで対応不可能なほどでもなく、だけれどそらたちに援護出来るほどの余裕もない／正に過不足なしといった感じ。

「タイミングが悪い。もしかして狙っているの？」

竜種を睨む。それに応じるようにギロリとそらの方に眼球が動く。まるで『どうだ？』とでも言うかのよう。笑われているようにそらは感じた。

「……………っ！」

その手に力が籠もる。

「いいでしょう、確かに受け取りました。      ことら！」

「うん！」

「あの触手は私が全部引き受けるから好きに突っ込んで良いです」

「えっ、良いの!？」

思わず驚きの声をあげる。いつもそらには一人で勝手に突撃する

な、突出し過ぎと怒られるのに、そらのお許しが出了。虎子にとつてそれが嬉しくないはずがなかった。

「ええ」

「本当にほんと？」

「うそは嫌いです」

「ありがと！」

虎子が真正面から向かってきていた触手を纏めて殴り飛ばすと、背の翼をピンと伸ばし加速用の魔力を一気に放出し、弾丸の如く勢いで突撃する。

その様子をそらは確認すると、

「では、やりましょうか」

銃の射撃モードは普段なら損耗が激しくて使わない魔力弾&質量弾・同時発射モードに切り替え、魔力刃も1mに長さを縮めその分密度を高くする。

そして向き直る。相手取る触手は虎子の分も含めて一気に二倍に膨れ上がっている。

四方八方に存在する触手。三百六十度包囲されている状況。それでもそらは挫けない、怯まない。逆に楽しくなってきたほどだ。そして知らずに笑みを浮かべ、

「いきますよ、竜種。触手の量は充分ですか？」

言った。

今この瞬間も目の前を白熱した火炎弾が通過していく。

ぐにやりと大気を歪めながら疾走する火炎弾は掠りもしないというのにMMJAの表面を焼く。

もしあれが直撃したら骨も残さず焼き尽くすだろう。

わくわくする。

どきどきする。

頬を焼くような熱風。

痛みすら感じる温度。

そのどれもが生を実感させる感覚。

だからこそ歡喜の感情が強く生まれ、それが麻酔の役割を果たす。故に矛盾に満ち溢れた 死をもたらず存在への、生を実感するための突撃。

「たつのしいなあああ！」

心の底からの本心。

虎子は鬼気迫るといった表情で突撃を続ける。

瞬く間に近づく目標。

赤い瞳がこちらを睨む。

来る！

そう思ったときには既に行動に移していた。

数瞬前に居た地点に火球が迫る。

避けた！

そう思った瞬間。

それは鳳仙花の如く弾けた。

\*

「！」

一人の少女の声にならない悲鳴が仄暗い車内にこだました。

それまでただ一心に見つめていた大型画面は現在四分割されており、それぞれ三人の魔法少女と竜種が写っている。そしてその中の一角。円條寺虎子が写っているそれは間違いなくリアルタイム映像であり、現在の危機的状況もまた淡々と写していた。つまりは墜落していた。

それを見て、ある疑問が浮かぶ。

何で自分はここで見ているのだろうか？

自分には助けられる力がある。どれだけのことが出来るのかわからないけど、無力じゃない。あの時見たいな、お父さんが怪我をし、ただ家で無事を祈っていたあの日の自分じゃないのに……。

なのはは今すぐにでも駆け出したい衝動が沸き起こるのを自覚する。

すつくと顔を上げる。

視線をある人物に向け、定める。

その瞳は確かな意志の光が灯っていた。

「片倉さんっ！」

自分を呼ぶ少女の強い声。

漸く来たなという思いと来てしまったなという思い。相反する二つの思いが同時に生じた。

「なんだい、フロイライン？ 見ての通り生憎と忙しくてあまり相

手は出来ないよ?」

片倉はまるで厄介な客を応対する図書館司書のような態度でなのはに対する。その間も目は画面を追い、指はキーを叩いている。

「わたしをあそこに行かせてください!」

人差し指を戦場が写る中央のモニターに向けなのは言った。

「ダメ」

ただ一言。

片倉は当たり前のことを言ったという風に頓着せずに言った。

「何ですか!?!」

「だってフロイラインは民間人だよ? たとえ魔法と呼ばれる力を持っていたとしてもフロイラインが民間人であることに何等変わりはないんだよ。だったならどうして民間人を戦場に出せると思うんだい? 少なくとも僕たち統合軍は民間人を矢面に出すようなそんなかつこ悪い組織じゃない。その逆で護るべき者の醜の御楯となるべき存在なんだ。そしてフロイライン、君は間違えようもなく護るべき者なんだよ」

顔を合わせず、紡がれていく言葉。

なのははそれを聞いても納得することは出来なかった。

「だったら……だったら、何でもこらちゃんもツバサちゃんもそらちゃんも戦ってるんですか? 血を流して、傷ついて、それでも戦ってる。傲慢かもしれない。だけどわたしはみんなを助ける力がある」

る。なのに、それなのにわたしは黙ってみてるしかないなんて」

そんなの嫌だ。

そう続く言葉は出なかった。

片倉が真っ直ぐなのはを直視していたからだ。

「彼女たちが戦ってる理由が知りたい？」

「……？」

なのはは怪訝に思い、それと同時に微かな怖さを片倉から感じた。何故だろう？ 少し考え、答えにいたる。ああ、そうか。この人は笑顔でいるけれど少しも笑っていないから。怖いくらい真剣な目をしているから。

気付くと自然に身体が強張る。

「うん、基本的にさ、戦う理由はそんな難しいものじゃないんだ。彼女たちはただ証明しているんだよ、自分たちの『有用性』をね」

「有用性……、ですか？」

「そう、有用性だよ。自分たちのような存在 特別魔法戦技官」

魔法少女 が必要であることを、有用であることを必死で認めさせているんだよ、自分たちの血を代価にして、ね。そしてそれは僕たちも同じだよ。僕たちは彼女たちに対して有用性を証明し続けなければいけないし、その義務と責任がある」

内心で特に僕は、ねと続ける。

「と、まあシリアスな話はここでお終い」



一転して片倉はいつものような雰囲気を纏い、なのはの眼前に一枚の紙とペンを差し出した。

「何ですか？」

なのははその紙を受け取るとざっと目を通した。其処には臨時任官という文字が目に入る。

「一応規則だからね、軍人でもなく軍属でもない者は戦場にだせない。だからこそ、一時的とはいえそれ相応の身分を用意する必要があるんだ。軍もお役所だからね、きちんと形に残さなきゃいけないんだよ」

「つまり、これにサインすればいいんですね!？」

「うん」

片倉は肯き、なのはは直ぐにサインした。

「おめでとう。これでフロイラインも一時的とはいえ魔法戦技官だよ」

そう言って立ち上がると、

「では高町なのは少尉。可及的速やかに5011小隊を支援せよ」

「はい!」

そうしてなのはは戦場への空へと向かう。

全ては自分の為すべき事の為に。

低い起動音を発し、ドアは閉じる。

ドアの向こう側へと姿を消した少女　高町なのはの後姿を見送るとともに、片倉はディスプレイへと視線を戻す。

次々にスクロールしていく文字列。

それらを高速で処理しつつ、それと並行して必要な指示を出す。

指示された作業を処理する合間、ふと上官の呟きが副官である福田定一の耳に入る。そう言えば自分の上官は集中度に従い独り言が増えていくという癖があったことを福田は思い出す。

「国家の存続と民族の存亡の為なら大抵のことが許容される。ならば人という種の存亡の為にはありとあらゆる行為が許容される。…否、違うね。ありとあらゆる行為を行使しなければならない、だ。そうしなければならぬほど人という種は追い詰められている。だからこそ、禁忌は禁忌でなくなり、逆にそれをしないという行為自体が罪になるのだろう」

福田を始め、車内に居る幾人かの耳には入っているのだろう呟きに応えるものはいない。その言葉は本人が意識せず無意識（というよりもさして意識せず）で紡がれるもので誰かに対してのものではなかった。しいて言うならば自己への問いかけ。故に、それに応えるものなど誰も居ないし、片倉自身求めてもいなかった。

「そして僕はその罪に怯え、罰を恐れ、故に」

福田が理解できたのはそこまでだった。片倉は己が為すべきを為

す為にさらに集中し、紡がれ続ける眩きは他者の耳にとっては支離滅裂のようなものに形を変え、理解できるのは本人のみ。故に福田も上官に倣い己が職分を果たすべく集中する。いまはただ約束を護るために。

扉を出たなのは車外に作業服を着た人物が誰かを待っているのに気付く。

「高町なのは少尉でありますか？」

「は、はい！」

突然の問いかけ、それも少尉という今しがた手に入れた馴れない呼称。なのだから当然の如くなのは慌てふためいたような返答だった。

「自分は宮藤技術少尉であります。高町少尉を補佐するように命じられています。なので少々お時間をもらいます」

なのはの返答にはさして気にせず、宮藤技術少尉は敬礼をすると要件を告げ、時間は敵とばかりにさっさと準備に入る。

「本当なら高町少尉専用に調整したいところですが今はその時間がありません。ですので、簡易的なものになることをご了承ください」

「え、え？」

戸惑うなのはそれを無視し進める宮藤技術少尉。  
足元に置いていた鞆を開き、そこからヘッドセットを取り出す。

なのはの頭部に装着される装備〃ヘッドセット／なのはの頭部に合わせ調整する。緩みなく、少しきつく感じる程度に。

「どうですか？」

「ちょっときついです」

「馴れるまで我慢してください」

直ぐですからと宮藤技術少尉は続けると、

「は、はい！」

宮藤技術少尉はちゃんとなのはの頭部にヘッドセットが装備されているのを確認すると上部に位置するバイザーを下ろした。

なのはの視界が薄い緑に染まる。

「本来なら網膜投影方式のほうが望ましいのですがあれは馴れるまで違和感が強いので、今回は従来のヘッドマウントディスプレイです。それでも民生用のものに比べれば格段に軽いのであまり負担にはならないでしょう。またこのヘッドセット自体がウェアラブルコンピュータですので有効にお使いください。そして、この使用方法ですが独立型戦闘支援ユニットが内蔵されていますのでその指示に従ってくださいれば大丈夫です」

本当はちょっとした電話帳ぐらいの取扱説明書があるんですよと宮藤技術少尉は冗談めかして微笑する。

「これで最後です」

と、最後にヘッドセットとリンクしている通信機兼受信機である装置をなのは耳に装着する。それはそれほど大きくもなくイヤホンほどの大きさだった。

「馴れるまで違和感があるかもしれませんが」

そう前置きすると宮藤技術少尉は機能の説明を手早くする。

「骨伝導式になっていますので大きな声を出さなくても大丈夫です。また受信機も兼ねており基本的にはこれを切ることとは出来ません。また定期的にバイタルデータも送信していますのでご了承ください」

「わかりました」

なのはは頷く。

「ではこれで終了です。高町少尉殿の武運長久をお祈りします」

宮藤技術少尉は肯き返すと背筋を伸ばし敬礼した。

「はい！」

そしてなのはは返事をし白きB Jへと変身する。

どういうメカニズムなのだろうか、と内心で思いそれと同時に周囲を確認し男性兵士が居ないことにほっとする。少なくとも男性兵士の前ではさせないほうがいいと彼女は判断しながらも、技術屋の常か興味深げにその光景を見ていた。

マジックガール、ダウン！ マジックガール、ダウン！

通信機から発せられ、空気を伝い耳朵を打つ振動。

その意味するところを瞬時に理解するものの、迫りくる触手によって行動は限定され、半ば強制される。

「つく」

ある一定ほどは緩和されているとはいえ、それでも全身を襲う強いGに思わず声を漏らす。

回避のための急激な機動／それを可能にする高機動空間戦闘用M J A。

迫りくる二本の触手をすれ違いざまに二つの光刃をふるい鋭利にとがる触手の先端を切り落とす。

その間も仲間の危機を告げるアラートが鳴り響く。

それでも、『まずい』とそらは露ほども思わない。そらの知っている虎子という少女は誰よりも強い子だ。こんなことぐらいで折れるほど弱くない。そう信じている。信じるということ。それは祈りにも似た想い。

迫る三つの触手。打ち・薙ぎ・払い、迎撃する。数多の触手を屠ったというのに尚、触手は怯むことなくそらを襲い続ける。

それも当然、触手は竜種のもつただの器官に過ぎず、恐怖といった根源的なものを感じるはずもない。そして竜種はそらに恐怖を抱いては居ないのだろう。脅威には感じているのだろうけれど。

二種の弾丸による銃撃／二つの光刃による斬撃。

それらによって迎撃し、触手を一手に引き受ける。

それでも尚、数が減る様子はない。まるで永遠に続くような錯覚にさえ陥る。

「再生です、か」

それも超高速の。

だとしたら根本的な解決が必要だ。そう、壊れた蛇口の水を止める為にその元栓を締めるような。刹那、視線を竜種に向ける。先ほどと竜種の様子に何等変化したものはない、だけれど瞳の色は違う。それはまるで自身を嘲笑っているようにそらには感じられた。

否、まるでじゃないでしょうね。

そして直ぐにそれを一部否定し、銃を握る手にさらに力をこめる。今やるべきことは信じること。

だって、

「あの子には夢がある」

だからこそ、こんなところで立ち止まるはずもなく。

だからこそ、信じなきゃいけない。

だからこそ、戦える、戦い続けられる。

それが 信賴するということなのだから。

\*



マジックガール、ダウン！ マジックガール、ダウン！

虎子の危機を告げる声。

ツバサはそれに行動で持つて返答とした。

間断なき銃声・銃声・銃声。

右腕と一体化している20mmガトリングガンは唸りをあげ、咆哮のように鋼鉄を吐き出す。

精密な狙いなどない、面制圧射撃。

そして制圧すべき標的である架空存在に次々に着弾し、己が役割を果たす。

少なくない数の架空存在が傷つき倒れていく、だがその多くが防性フィールドを持たない小型種のみ、防性フィールドを張つてある架空存在の多くは防性フィールドに阻まれ大きく威力を減じた弾丸では収束させ一部に集中させない限りは運動エネルギーを減少した弾丸では虫型架空存在が持つ強固な外殻を貫くことは出来なかった。しかしそれは幾度となく繰り返されてきた行為である。今更、落胆などしない。

「……………リジェクト」

ツバサは銃身が焼き付け、最早使用不可能となり只の鉄塊と化した20mmガトリングガンを切り離し、放棄。瞬時に重みの無くなり身体バランスが崩れるのを防ぎながら、右腕に再度ガトリングガンを転送する。普段ならガトリングガンを放棄などしないのだが今はその時間さえ惜しい。

転送されてきたガトリングガンの動作確認もなくすぐさま発砲。

迫りくる二匹の甲虫型中型架空存在。

その流線型の外殻に着弾／弾かれ逸れていく弾丸を気にもせず、集中させていく。

驟雨のような弾丸が収束し、その圧力に架空存在が張る防性フィールドは耐え切れることは出来ずたばろに引き裂かれた。そして覆い包むような弾幕によって架空存在は散々に外殻を撃ち砕かれ撃破される。

だがそれは向かってくる二匹のうちの一匹のみ。

もう一匹の架空存在は撃破された架空存在と直線上に位置した為結果的に撃破されたほうの架空存在を盾にするようにし、弾幕を回避していた。

眼前。

迫りくる残りの架空存在を止めきれず、最早回避することも出来ないほどの間近に迫る。故にダメージを受けることをツバサは覚悟し、それを最低限にする為に身体の前面に常時展開されている防性フィールドとは別の防御障壁を展開させる。

黄色く光り輝く幾何学的な模様が空中に現れる。

「……………」

迫り来る衝撃を覚悟し、奥歯を噛む。

瞬間。

来るはずの衝撃はなく、それは永久に来ることはなかった。何故なら、架空存在が砲撃の一撃によって貫かれたからだ。

＊

一キロほど後方。

砲身を掲げる機影が二つ。

実験重機動歩兵小隊派遣実験隊所属の二体の第三世代機・仮称名  
称『カムラギ』だった。

「うお、初撃から命中!？」

思わず驚きの声を上げるのは今の砲撃を行った張本人でもある柿  
崎である。

「おい運がいいな、どうやら今日はついてるらしいぞ」

坂井はいけるなと内心で呟きながら僚機と自機に装備されている  
主装備である試製零式電磁投射砲は見る。

カタログデータでは可能であるとされていたが実戦で中型以上の  
架空存在を撃破できることが証明された。まだまだ問題が山積され  
量産化には程遠い代物だがこれが制式採用され、部隊に配備されれ  
ば架空存在との戦争において大きな転回点となるだろう。それだけ  
のポテンシャルがある。そう坂井はその威力に確信した。

「じゃあ往くか。我らがお姫様を助けるための竜退治に」

柿崎が興奮した口調でいい、

「あんまり軽口を叩くな。それでなくともお前は無駄口が多い」

坂井は諫めながらも、既に行動に移していた。

「ははっ！ 気にスナ。俺はフラグクラッシャーだぜ？ 出撃前  
に田舎に居る恋人と結婚するぐらいのことは言ってる」

ああ、確かに出撃前にそんなことを言っていたなと坂井は思い出

しながらもバカ野郎めと呟いた。

＊

衝撃によって陥没した大地。

その中央、その原因になった少女　　円條寺虎子　　は声もなく泣いていた。

現在の虎子は五体満足とは到底言いがたいものだった。

顔を護るため腕をクロスさせ防御したことにより頭部は無事だったが、その代償として原型を持たないほど半壊し融解した両の腕。

同じように身体の種々各部が炎弾の熱によって溶かされ、背部の八対十六枚の翼は墜落の衝撃によって拉げ折れ砕け散っている。

見るからに痛ましい状態。

だけれど虎子は痛いとか苦しいとか、そんな要因で泣いているわけじゃなかった。

ただただ悔しかった。

沸々と自己の内心から湧き出る感情。煮えたぎるような思い。

自分は信頼を踏みにじってしまった。

そらが許してくれた。私のことを信じて許してくれたのに、この様は何だ？

何て、　　惨め。

何て、　　無様。

今の自分は何だ？

壊れかけのガラクタ同然だ。

まるであの頃のボクみたいだ。

こうなってしまったのは誰のせい？

自分と、そして     アイツのせい。

許せる？

許せない。

許しちゃいけない、絶対に。

それなら、     どうしたらいい？

「……はは、ははははっ！」

決まってる。

決まってるのだ。

そんなことは一々確認する必要もないぐらいに簡単なことだ。

「約束を護る     それだけっ！」

だからこそ立ち上がる。

ボロボロの足でふらつきながらも立ち上がる。

約束を護るために                   ！

「…………… 転送！」

紅い粒子が虎子を中心に出現し光り輝く。

二種類の幾何学的な紋章が全身に現れ通過していく。転送し、転送されてくる新しいマジック・マテリアル・ジャケット・アーマー。破壊される前と寸分違わぬ姿。但し、虎子の顔に負った傷や汚れ以外はそのままに。

「…………… うん、大丈夫。やれる！」

手のひらを開閉させ、足を軽く振り、ちゃんとロスなくすべやかに動くことを確認し笑う。

いける。大丈夫。やれる。

顔をいまだ先ほどとなんら変わらぬ健在なままの架空存在へと向ける。キッと睨み付ける。

「今いくからね！」

背部の八対十六枚の翼からゆっくりとそしてだんだんとその量を増やしながらエーテルの粒子が放出されていく。そして一定量を超え、爆ぜるように一気に空を駆け上がる。まるで鏖のような勢いで

そうして再び紅い妖精は空へと戻る。友との約束を護るために。

★

トリガーを引き、撃った。

手には火薬が爆ぜた衝撃の感触が残り、その結果向かってきた触手は肉と体液を撒き散らしながら爆散する。

「……………」

ポーカーフェイスを心掛けているそらであつたが、その表情には急激に消耗していく弾丸の数に知らず知らずに焦りが出ていた。魔力弾は問題ない、問題があるのは数に限りのある実弾であり、もはやその量は指の数もない。

「それでも」

戦い続けるしかない。

エーテルの粒子に還元が空間の占める濃度が高まっているせいか時間の経過と比例するように触手の再生速度が上がってきている気がする。

それは同時に外部から供給されるエーテル量の増大を意味し、こちらの出力が上がるというメリットもあるので一概に悪いというわけではない。それでも数の暴力を維持されるのは多少の出力が強化されてもほぼ意味がない。

高速で回転する思考。

その間も休みなく触手の襲撃は続く。

「……………」

全身に襲い来るGを無視した高機動。射線上に複数の触手が来る

ように機動し誘導し、目論見どおり複数重なった瞬間、撃つ。

三本の触手が貫かれ爆ぜる。

それでも全体の数から言えばごく少数。さらに近いうちに復活するだろう。ジリ貧もいいところだ。

背後、迫る複数の触手。囲まれないように機動するがそれでも限界が来る。とうとう触手の群れに補足され三百六十度全周を包围される。

それまで回遊魚のように静止し死というように動き続けてきたそれが、一転して静止した。

そらは周囲を見回し、深く息を吸い込み深呼吸をする。それと同時に密度の濃いエーテルを全身に吸い込み自己の魔力に還元する。そして還元した魔力を全てデバイスに叩き込む。過剰な出力に悲鳴を上げ、軋みをあげる二丁のデバイス。結果、恐ろしいほど密度の高い刃が形成される。

そらはふた振りの刃を構え対峙する。

一種の均衡が生まれ、すぐさまそれは破綻する。

一斉に襲い繰る触手の群れ・群れ・群れ。

「はああああああああああつ！」

そらは息を大きく吸い込み裂帛の気合とともに吐き出し、全力を込め、刃を振り下ろす。

魔力刃は二つの軌跡が描き、交差し、十字を描き交じり合いながら疾走していく。

その斬撃により包囲の一角は崩れ、機動制御用の全てのエーテル放出口のベクトルをそこに向けると溜め込んでいたエーテルを放出し、爆発的な加速を生み出しながら突破した。

百メートル近く疾走した後、エーテルの一転突破の衝撃力を喪失し停止する。

そらは背後に振り向く。



背後の光景を見、ギリツと齒軋りしたくなる気分だった。

其処にはそれによつて置き去りにされた触手の群れが一まとめになつていたからだ。

もし今ここで最初期にツバサが放つた試製59式75mm魔力砲ほどの火力があれば根こそぎ殲滅できる絶好の機会なのに、と。

それでもその思考は直ぐに状況打破のために回転する。不足は馴れている。むしろ、必要なときに必要なものが手元にあるというほうが珍しい。だからこそ絶望するほどでもなく、落胆もすべきではない。必要なのは期待じゃない、気転だ。

刹那の思考。

たどり着く答えが、その切り札というべきもの。

仕方ありませんね、と内心で呟くと、二つの銃から魔力刃形成機構付高周波ブレードを外し、それを一つに重ね諸刃の刃とする。そして、銃を太腿にあるホルスターに仕舞うと腰の部分に居装備していた三十センチほどの大きさの柄を取り出しそれに取り付けた。

それこそ空の切り札と呼べる存在。大型の架空存在さえ両断する破断の大太刀 名を零式破断刀 総てを断つ無双の刃である。

柄とMMJAに存在するマジックサーキットを繋げ、より大量の魔力を注ぎ込む。その量は単体で使用していたときの数乗倍。更なる悲鳴を上げながらも零式破断刀は歓喜の声を上げるように身を震わせ、魔力刃を形成する。

先ほどまでとは比べ物にならないほど巨大な魔力刃。その直径はその身長以上はあるだろう少なく見積もっても二メートルは超える。それでも尚、それが限界ではない。魔力を注ぎ込むほどに、破断刀はそれに応え、魔力を贅として貪欲に巨大に強く刃を伸ばす。

いまやその大きさは三メートルを超えるまでに成長し、大気を震わすほどに魔力を溜め込んでおり、その力の解放を今か今かと待ち望んでいるように破断刀は震えていた。

そらは破断刀の状態を確認し満足すると、裂帛の気合とともに全力を果たさんと大上段に構える。

目標を見定め、

「いきます」

よ、と続く言葉が出ることはなかった。

眼前を巨大な光線が貫いていったからだ。

刹那、呆然としながらも光線を発射元に視線を向ける。

そしてその後方には砲手であろう白き少女が、杖を構えていた。



頬に感じる風の冷たさが久しぶりの空であることを実感させる。

それと同時にどれほど自分が飛ぶという行為が好きであったのかわかる。まるで小さな水槽から広大な大海に放流された魚のような気分。解き放たれた爽快感。そして悟る。飢えていたのだ。餓えていたのだ。高町なのはという名の少女は大空という大海を心底から渴望していたのだ。

ああ、帰ってきたんだ……。

自然に頬が緩み、直ぐにそれを引き締める。

思う存分空を楽しむのは後にしよう。今は友達を助けるのが先決だから！

高町なのははそう思い。一段とスピードを上げる。

なのはの視界／薄い緑に染まる世界。

バイザー越しに見る視界にはIFFを示す光点や幾つかの情報データなどが映っているのだが、詳しい機能を知らないなのはにはそれが何を示しているのかを判別できないでいた。

『はじめまして』

耳に装着した送受信機から突然聞こえてきた声が、なのはの耳朶を震わした。

「え？」

突然の声に驚きの声を上げる。

『突然のご挨拶、失礼します。私は独立型戦闘支援ユニット・オモイカネと申します。以後、お見知りおきを』

「はい」

そう言えば宮藤技術少尉がそう言っていたことをなのはは思い出す。

『緊急時ゆえに簡易説明ですがご了承ください。私は主に戦域管制・戦術補佐・情報処理などを担当し、主に補佐支援することを目的に存在しています。何かご質問はありますか？』

その問いに少し考えてからなのはは返答した。

「この光ってる点と数字やグラフは何ですか？」

『中央に位置する二重円形の光点は主のことをしめしております。また円形の光点は5011小隊の三人を示しており、それぞれ円の中に書かれている1から3までのナンバーが円條寺虎子少尉・叶野ツバサ少尉・芳野そら少尉を順にあらわしております。四角形の光点は架空存在を表しており、光点の下に書いてある数はおよその数を示し、光点の大きさはその架空存在のクラスを表しております。また右上に表示されているのは方位・高度・時間・心拍数などのバイタルデータです。他にも様々な機能がございしますので後ほど詳しくご説明いたします』

その説明に納得したのか頷くと、

「オモイカネさん、ありがとう」

礼を言いながら、なのはは自分の居る場所から一番近い円形の光点に急いだ。その光点には3の数字が写っていた。

直ぐに戦場の光が見えた。幾重も交錯する激しい光だ。

『距離1367、二時の方向に敵影確認』

オモイカネからの報告を受けなのはは視線を向ける。

「そらちゃん！」

ヘッドセットの機能により拡大された視線の先、その中心に友達の姿を見つけた。

先ほどとは違いそらちゃんはフェイトちゃんのデバイスであるバルディッシュのザンバーフォームにも似た大きな光の剣を構えている。

そんなそらちゃんの前方には触手が一塊に纏まっていた。

チャンスだとなのはは思い、デバイスであるレイジングハートを構える。

「いくよ、レイジングハート！」

『Yes, my master! A firing locked is cancelled.』

レイジングハートは己が機能を起動させ、なのはに伝える。それ

と同時に緑の視界に変化が生じる。

『射撃管制モードに移行します。これに伴い戦略偵察衛星 センジユ からの測距データを更新、及び戦術サーバ 賢人 との接続を確認。統合情報処理システム『グラムサイト』を起動します』

オモイカネの言葉とともに中央にレイクルが現れる。その周囲には敵までの距離・誤差の数字、右上には風速・風向・気温など射撃の影響を受けるだろう要素の情報が控えめながら写っている。

「ありがとう、オモイカネさん！」

なのはオモイカネに礼を言った。

『いえ、礼を言われるほどのことはありません』

オモイカネはそう応える。その間もレイジングハートは動き続ける。

『All right. Load cartridge.』

勢いよく排出されるカードリッジ。

『Buster Mode』

レイジングハートに四つの環状魔方陣が取り巻くように出現する。

『Divine Buster.』

「デイベイン・バスター！」

桃色の魔力が四つの環状魔方阵を通過することに増大し加速していく。

デイベイン・バスター　なのはの持つ膨大というしかない魔力を放出し直接目標に叩きつけるという単純ながら恐るべき威力を持つ直射型攻撃魔法　高町なのはの主砲である。

空間を桃色の魔力が疾駆する

一見現実感のないように見えるそれは、凶暴な力を秘め今か今かと自らの開放の瞬間を待っていた。そしてそれは程なく成就する。確かな戦果と共に。

それは根こそぎという言葉でしか表せないような見事なものだった。

正に殲滅。

正に塵殺。

それを目撃したそらは暫し呆氣に取られたように呆けていた。

「すさまじい威力ですね……」

ごくりとのが鳴り、ぶるりと背筋が震えた。

一瞬、それが自分に向けられた瞬間を想像し、直ぐにそれを否定する。

なのはちゃんがそんなことをするはずがない。ごく短期間の付き合いでしかないけれど、そう確信させるだけの何かをなのはは持っているようにそらには感じられた。だからこそ、そんなことを想像



してしまった自分を恥じ、後で謝ろう、そしてお礼を言おうと決意する。そう、すべては終わった後に。

「そんなこと有り得ませんね。むしろ、そう一瞬でも想像してしまった自分を恥ずべきでしょう。それにしても……」

先ほどの砲撃は試製59式75mm魔力砲と同等、否それ以上の威力があつたようにさえ見えた。

砲撃主の元へと視線を向ける。

視線の先、杖を構える白き少女。

その瞳には、蒼と紅に染まる空を背景にした彼女の白さが良く映えて見えた。

「彼女の様子を見るからに、これが全力全開というわけでもないのでしょうね……。まったく、なんて出鱈目」

予想外の助力ではあつたが、当初の目論見は成つた。ならば是非も無く。

「ですが、今は都合がいいです、ね」

いまだ寸分の消耗のない零式破断刀を見、そらはにやりと笑う。

だったら最大限にこの状況を利用するのが良いでしょう。

獲物を横から搔つ攫われ怒りに震えているような唸り声をあげる零式破断刀の切っ先を竜種に向ける。

全ての力を出し切らなければあれを打倒することなど不可能なのだろうから、なのはに對して感謝こそすれ非難する理由はない。

だからこそ、今は駆ける時！

周囲に浮遊するエーテル粒子を掻き集め、それを変換し、マジックサーキットを通じMMJAに行渡らせる。更に強く蒼く発光する。

「征きますよ、零式破断刀っ！」

裂帛の気合を込めそらは叫ぶ。

そういうキラじゃないのは自分でも重々承知している。だけれど、たまには良いでしょう。友達をやられて黙っていられるほど、私も大人ではないようです。

「うおおおおおおおつつつつつつ！」

主の気合に応えるかのように零式破断刀は歓喜の咆哮をあげ突き進む。

虎子を彷彿させる呐喊。

そらを迎え撃つ竜種。

生き残りの触手が五つ、竜種の背部から現れ五種類の軌跡を描きながらそらの眼前に迫る。

それをなのは放ったアクセルシューターが獲物を狙った猟犬さながらに自立誘導し次々に命中し迎撃し防ぎきり、呐喊を援護する。その間もそらの歩みは決して止まらない。想定を超え流れ込む魔力量に零式破断刀が歓喜に打ち震えるかのように咆哮をあげ、全身を覆うMMJAが悲鳴のように各所を軋ませながらも前進し続ける。まるで回遊魚のように、歩みを止めた時点で死ぬかのように、ただただ零式破断刀を突き出し真っ直ぐに進み続ける。

なのははまるで祈りにも似たそらの行動を成就させるべく、自身が出来る最大限の努力を払う。アクセルシューターによる援護もその一つであり、今この瞬間も自身のあふれるような魔力を解き放ち、そらの行く手を阻む存在を打つ・撃つ・討つ！

そしてその願いは成就する。

終に切っ先は竜種の張る七重の防性フィールドに食い込んだのだ。

「いっけええええっ！」

視界を占めるのは鬨ぎ合うように弾ける光子が満ちた。

そらと竜種の互いのフィールドが重なり合い干渉している故に、起きる現象。まるで火花のようにエーテル粒子が弾け、周囲の空間に飛散し、直ぐに消えていく。

徐々に、着実に、確実に、七重にもわたる障壁を食い破っていく零式破断刀。それは刃を形成する魔力と引き換えのものであり、障壁を一枚破ることに恐るべき魔力の密度を誇っていた刃は減耗していった。

「これで、最後ですっ！」

そして終に七重目の障壁を打ち破る。それとほぼ同時に己が役目を果たしたかのように魔力刃は崩壊、ナイフほどまで小さくなった刃を構成していた魔力は構成を解かれエーテルの粒子となり空間に溶けて消えた。

自身の持つ魔力はほぼ使いきり、手持ちの武器がなくし、絶体絶命という言葉すら生温いというのにそらは不敵に笑う。

何故なら。

「大遅刻ですよ。後でお説教です」

見慣れた赤い閃光が視界に入っていたのだから。

虎子は感謝していた。

こんなボクを信じていてくれたことを。

だからこそ、今はその思いに応えなくちゃいけない。応えなくちゃ嘘だ。

だからこそ、だからこそっ！

「もっと、もっと 早く、速く！」

虎子の思いに応えるように、虎子を覆うエーテル粒子はより強く発光し、より強く加速する。エーテルの残光が尾を引き、さながら紅い彗星のように輝きを残しながら空間を疾走する。

全身を覆うMMJAの各部からは白い煙が棚引き、放熱口からは強制的に排出される廃熱によって陽炎を生むほど周囲の空間を加熱させていた。

それを虎子は気にしない。気にも留めない。オーバーヒートしようが構うものか。後でどうなるうか知ったことか。いま我武者羅に、遮二無二に、行動せずして何時すればいいのだ？ だからこそ、だからこそ、虎子はただただそらがこじ開けてくれた道を突き進む！

右手を前に。

現在右手は可能な限りのエーテル粒子を纏い、右手が見えないほど密度の濃いエーテルの塊と化している。

虎子は自身を一本の矢に見立ていたわけではない。それでも、視

る者がみなそう連想するように今、一本の矢と化し竜種へと向かう。竜種もまた身に迫る脅威に無策ではなかった。むしろ今この場に存在する誰よりも強く自らに迫る危機を本能的に悟っていた。

ぎょろりと瞳を動かし向かいくる脅威を確認すると、大きく顎を開かせ、灼熱の炎を吐き出した。それはそれまでの火炎弾のように圧縮してはならず息吹のようであり、それゆえに衝撃力などの物理的破壊力はそれにはなかった。だけれどその放射線状に広がる効果範囲は火炎弾の比では無く、その熱は肉を血を骨を焼き尽くすには充分に過ぎた。

前方を覆う焰の壁。

躊躇いを感じるには十分するほどの脅威。

それでも寸毫も速度は鈍ることは無く、

「うおおおおおおおおおつ！」

背部にあるスタビライザーの役割も合わせ持つ十六枚の翼を一点に向け、焼付けといわんばかりに魔力を推進力に変え放出する。それは無茶に無茶を足し無謀を掛けるような行為。今この瞬間にでも瓦解し分解し墜落しても不思議ではない行為。それでも虎子は勢いを弱めるどころか空間を漂うエーテル粒子を根こそぎ掻き集め／変換／放出。そして加速・加速・加速！

加速に懸命に耐えているのか十六枚の翼が悲鳴を上げているように激しく震える。それがどうしたというように、虎子は喉よ枯れろと声を大にし叫びながら炎の中へと突き進む。

右手の先、眼前に迫る炎を割り道が姿を現す。そしてその道の先には大きく顎を開けた竜種。

「見えた！」

それが目標地点。それこそが今為すべき終着点。

虎子は躊躇無く迷い無くその道を疾走する。

一段とスピードを上げ、距離を詰める／縮める。

そしてその道の先。

狙うは只一点。

竜種が大きく開けたその顎。

竜種は危険を感じたのか直前にその顎を閉じようとした。それはとつさに反応した反射の動作であつたのかもしれない。だけれどそれは炎の勢いが止まるということでもあり虎子にとって見れば幸いなことでもあつた。

半ば閉じられた顎。虎子はそのまま変わること無く、勢いをつけたまま右手を突っ込んだ。

それはまさに槍であつた。

鋭く連なる牙を半ばから砕け散らせながら、強引に右手を進ませる。そしてそれは肩口までいき漸くその動きは止まつた。そして竜種の口腔内の破壊と引き換えに虎子の右手はボロボロに、流体金属とオイルが血のように傷口から腕を伝い流れ落ちる。

竜種は痛みに怯えることは無く、己の眼前に存在する敵に対して両の瞳を向ける。その瞳は純粹な怒りに燃えていた。

「……あげる」

そんな竜種に向かい虎子はぽつりと呟いた。

竜種は虎子の右手ごと噛み砕こうと力を強める。

「ボクの宝物をキミに上げるっ！」

そう叫びながら残っている魔力を全て左腕に集め、竜種の下顎目掛けアッパーを放つ。

虎子の拳が竜鱗を砕き軋みをあげながら肉にめり込み、それと同時に無理矢理右腕を肩口から自らの腕を力任せにもぎ取る。

潤滑油と冷却液、雑多な破片を飛散させながら最後の余力を振り絞り急速離脱。

虎子の眼前に竜種の顎から血とエーテルの紅い飛沫が空間に飛散し、直ぐに消えていくのが見えた。

次の瞬間、絶叫を発した竜種ははまだ傷ひとつ無い尾を振るい片腕の虎子を薙ぎ払う。

反射的に回避運動を行なうも、本来の機動からは見る影もないほどその動きは遅く防御もままならないままその身にまともに受ける激しい衝撃と共に叩き落される虎子。見る見る間に大地に迫るその刹那。虎子は時間が何万倍にも引き延ばされるような感覚に襲われた。

それは瞬きするよりも短い刹那の時。

虎子は少し昔の頃を思い出していた。

その頃の虎子の世界は自宅のベッドから見える窓に映る景色が世界の全てだった。

幾たびかの不幸により、円条寺虎子という名の少女は物心つく頃から歩くことはおろか這いずることすら困難な体。四肢欠損だった。故に小さな窓から望める世界が虎子の全てであり、世界が広いということすら実感として湧くこともなかった。

だからこそ、両手両足を得た虎子の喜びは筆舌に尽くしがたいものであり、土を始めて踏んだ感触・水を掬い感じた冷たさ、そんな初めての経験を今でもうつすらとだけれど思い出すことが出来る。ヘレン・ケラーではないけれど虎子にとってそれらはWのアルファベットと同じ意味を持つのだ。

そんな虎子にとって四肢を失うということは何よりも耐え難いものであり、それ故に仕方ないとはいえ自ら喪失することを決断したのだからそれがどれほどの意味を持つものかを虎子を知る者にとつては直ぐにでも理解出来るだろう。

ゆっくりとした時間の感覚に戸惑いながらも、直ぐ来るであろう現実に対する恐怖を感じながらも、虎子は笑っていた。

あの頃には戻りたくない。歩き・走り・泳ぎ・そして空を自由に駆けることが出来る。一度味わってしまったのだ。もう見ているだけで我慢できるわけじゃないじゃないか。

だから虎子は無意識に左腕を竜種に向け、

「 B U M B ! 」

それが意識を失う前に言った最後の言葉だった。

そしてその言葉がキーになったのか、それともただの偶然か、竜種の口腔内に残っていた右腕に内蔵されている超小型スフィアキューブが臨界点に達するほどの超高速回転することによって膨大な熱量を生み出し、いまだ右腕に残っていたエーテル粒子と連鎖反応した結果　。

激しい爆発が起こった。

口腔内という半ば密閉されている空間故に爆圧は竜種の体内を蹂躪した。

\*

場面は時間を少し巻き戻る。

そのの呐喊を援護し、それが成功した直後、とつのそらからなのはに連絡があった。

曰く　、貴女の全力全開を見せてください。

なのはは逡巡すること無くすぐさま肯き、肯定の意の返事をそら



にたいして伝えた。

「レイジングハート、全力全開……いけるね」

『All right, My master?』

何を当たり前のことを聞くんだというようにレイジングハートは応える。

「オモイカネさん、出来るだけの情報をレイジングハートに送って」

『了解しました』

オモイカネはなのはの命令を、己が機能を最大限活用し、レイジングハートに情報を送った。それらは最新の測距データは勿論、刻一刻と変化してゆくデータに加え気温・湿度・気圧・重力といった外的要因、及びなのは自身のバイタルデータといった内的要因などであり、得ることが出来る最大の情報を精査、選択し送ってゆく。

『Load cartridge.』

先ほどとは違い残存する全ての残弾カートリッジが勢いよく排出される。それと同時にレイジングハート内部で急激に高まる魔力。

『Excellion mode』

そしてレイジングハートは最良の形態へと変形する。

なのはは一つ深呼吸し、目標を見定める。

緑の視界に浮かぶレティクル、その中央に標的が来るように調整する。それはレイジングハートと同期しており、以前よりもさらに

精確な砲撃を可能としていた。

準備万端。

そう確認するとなのはそらと虎子の様子を確認する。

丁度、爆発が起こった直後、虎子は無事にそらに回収され、そらに抱きかかえられながら離脱していた。それを見、安全距離まで離れるのを待つ。

目蓋を閉じ、なのはは心の中でカウントを始める。

(4・3・2・1・0！)

そして目蓋をはっきり開け、

「これが……、わたしの全力全開っ！」

撃った。

「スターライト・ブレイカーッ！」

『Starlight Breaker ex.』

スターライト・ブレイカー／その名の通り、周囲に存在する魔力がまるで流星の如く収束する様は『星の光』の名を冠するのに不足は無く、なのは自身とカートリッジ、それにプラスして周囲に存在する魔力（その中にはディバイン・バスターで使用し、空間に残存していた魔力も含まれる）まで根こそぎ収束・圧縮・投射し標的に叩き込む、なのはの全力全開の魔法Ⅱ砲撃である。

なのはの身長以上もある桃色の極太の光線が空間を迸る。

頭部で起きた爆発による影響もあり、あれほど強固であり堅固であり鉄壁を誇っていた七重にもわたる防性フィールドは最早存在せず、何も遮るもののないまま竜種に直撃する。

起きる爆発／轟音。

直後、断末魔に呻くような絶叫が周囲に響き渡った。痛みへのた打ち回るかのように暴れ、その動作によって爆煙を晴らしその姿が露になる。

その姿は満身創痍と言ってもよく、あれほど偉容を誇っていた竜種の面持ちがないほど弱々しくなのはの瞳に映った。

それでもまだ生きていた。

後一押し、それでケリがつくのは誰の目にも明らかなのだけれど、今此処に至ってそれが可能な人間はいなかった。

芳野そら　戦闘機動不可能なほど消耗し、現在虎子を大隊が設置している後方支援を担当する野戦車両群に搬送している「戦力外」  
円條寺虎子　右腕喪失、及び気を失っており戦闘不可能「戦力外」。

高町なのは　全力全開のSLBを使用した為、一定時間、魔法の使用が不可能「戦力外」。

絶望の色が軽くなのはの瞳に浮かぶ。

どうすればいいんだろう？

そんな疑問が浮かび、直ぐにはその答えが出そうになかった。

そのときである、風を切る音がした。

なのははその音がした方向に視線を向ける。視線の先、直天方向から降下する黄色の閃光が軌跡を描きながら急速なスピードで竜種に迫る。

「うちのこと忘れたら駄目だよ」

なのはの横を通り過ぎる瞬間、そんな言葉がなのはの耳朵を打った。次いで強烈な衝撃波が襲う。

その衝撃に耐えながらもなのはは思考する。

聞き覚えのある声だ。それもつい最近。

直ぐになのはは思い至る。この世界で出来た友達は三人だったと

いうことを。

「ツバサちゃん……？」

呟くその言葉を肯定するように。閃光は停止する。

いまやなのはの双眸でその姿をハッキリと視認できる。そう、その閃光の正体はツバサだった。

そしてツバサは竜種の十メートルほど前で静止／ホバリングで帯空。

身に着けている全ての砲口／銃口を向ける。

なのははツバサの姿に目を円くして驚いた。

単純に記憶の中のツバサの姿とは比較にならないほど大きく変化していたからだ。

メカメカしいとでも表現するのが適切なのだろうか、一見して人に見える部分よりも機械然とした部分のほうが多かった。

まるで悪い冗談のような無骨な火器群 両肩からそりだす二門の巨大な砲・背部に装備されている弾倉とミサイルコンテナ及び各種センサー類で構成されている複合装備・両手に装備されているガトリングガン・両足には十連マイクロミサイル×2という重武装。

また体の各部に存在するスタビライザーの役割を持つ姿勢制御翼が空間機動を安定させている。

それこそがMMJ A - L02と呼ばれる形態であり、切り札。

ツバサ専用強襲殲滅兵装である。

ツバサは装備する全ての火器を竜種に向け、狙いを定める。

バックパックに存在する探査ユニットが起動。次々に収集・入力されていくデータ。それらによって修正／補正されロックされてい

く目標。

一度瞼を閉じる。

本来ならありえないような大きな隙。だけれど問題ない。今のうちには三つ目の瞳がある。

生まれ持った双眸以上に鮮明に移す瞳　蒼穹の向こう側に浮かぶMMJA-LO2からのアクセスにのみ許される限定条件を解除され本来の機能を取り戻した『戦略偵察衛星・センジュ』から送られる画像で十分すぎる。

傷つき、今にも倒れそうな架空存在。

何も知らなければ思わず可哀想と感じてしまうような光景。だけれど、

「お前はうちの敵なんだ」

濁りが生じている竜種の瞳に向け、そうツバサは言った。同情も憐憫も慈悲も容赦も寛容も有り得ず、ただただ刑を執行するよに。

だけれど、

「じゃあね、バイバイ」

準備が終わり、最後にツバサはそう竜種に笑いかける。もし、生まれ変わりがああるならば、次は架空存在なんか生まれなくて祈りながら　引き金を　引いた！

「フル・オープン・ファイア！」

一斉に銃口／砲口から放たれる銃弾／砲弾＝鋼鉄。両手両足の指の数を合わせたとて到底たりないほどの各種ミサイル。

装備する全ての火器が唸りをあげ竜種に一斉に殺到する／正しく

火力の奔流。

夥しい量の鉄量。眩暈がするほどの爆発の連鎖。加速度的に訪れる竜種の破滅。そしてそれこそが単純なる戦場の理。

濛々たる白煙が銃口から棚引き、ツバサの全身から排熱が強制排出される。

実質一分にも満たぬ程度の攻撃。だけれど、その短期間の攻撃によつて竜種は致命的な打撃を受けた。

「けれど、本当に終わりなの……？」

爆煙に覆われ竜種の状態をはつきりとうかがい知ることが出来ぬままなのはは呟いた。今だ慣れぬ硝煙の匂いに嫌気がするが、それでもしつかりと竜種の陰を見つめる。

次の瞬間、爆煙を吹き飛ばす凄まじい咆哮が大気を激震させた。魂を直に震えさせるような苛烈な咆哮。

思わずなのはは耳を押さえ、その原因に目を向ける。

それは慟哭であつたのだろう、なのはは竜種が音を立て地に倒れ伏すところを目撃した。

そこに本来感ずべき現実感が無かつた。まるで作り物を見ているようにさえ感じられた。それでも胸に湧き上がる感情を自覚する。

それは言葉で表せないような複雑なものだけれど安堵の気持ちがある。その中で一番強いことを確かになのはは感じた。

その瞬間、

『おめでとう！ 君のお陰で架空存在に勝利できたといつても過言ではないと僕は思うよ』

通信機から片倉の声が聞こえてきた。純粹に褒めているのだろう。その声は隠しようも無く喜色に溢れている。

「ありがとござ……」

照れながら答えようとしたとき、不意に意識が遠のくように、視界がぼやける。それと同時に耳も遠くなり、あやふやな認識のまま重力に取り込まれていく。

落ちちゃう……。

ぼんやりとした意識のまま、現実感を感じないままにそう思った。死んじゃうかもしれないなあ。

他人事のようにそう思った。

息を吸うように空を飛んでいたはずなのに、全身が鉛に包まれているかのように身動きが取れない。

ゆっくりと緩慢に風景が通り過ぎていく。

もうすぐ地面に叩き付けられるんだろうなあ。

そんなことを思いながらついになのはは意識を手放した。

直後、

“こちらアエカ一番、こちらアエカ一番！ 目標を確保した。これより速やかにH Qに送る。お姫様に異常なし。オーヴァー”

そんな報告がH Qに送られた。

報告を送ったアエカ一番のコールサインを持つ坂井純一朗は今まで僚機の柿崎機と共に戦場の火消しに駆け回っていた。

竜種が出てきて以来5011小隊は拘束され本来の役割が困難になり結果的に役目から外れていた。故に、その穴埋めに当たってい

たのが彼らだった。第三世代機の持つ良好なる機動性／火力がその役割を十分以上にこなしていた。そして騎兵隊よろしくなのは危機に駆けつけたのだ。悲鳴のような片倉の最優先命令に従い。

カムラギの精密作業可能マニピュレーターには意識の無い白い魔法少女はまるで壊れ物を扱うかのような慎重さで出来る限りやさしく抱きかかえられていた。先ほどから煩いほど片倉からの直通通信が送られてくる。手間を惜しんだのか暗号化さえされていない。隊長も心配性だな。

内心でそう思いながら苦笑する。まるで道化を気取る片倉のことを坂井はそれほど嫌いではなかった。心根は人並み以上に優しいのだろう。現状においてさえ彼女たちに頼らなければならないという情けない思いを坂井は感じるのだ。隊長ゆえの重圧は坂井の比ではないだろう。それ故に偽悪者のように振舞うその様にある種の哀れみに似た思いさえ抱きたくなる。だからこそ、急ごうと思う。傍らにいる周囲を警戒している見事生き残った僚機と供に。

地上／熱が燦る中、羽を休める小鳥のような風情でツバサ八黄昏に色づく空を見上げていた。既にMMJA-L02の無骨な装備は転送され影もなく、MMJAさえ解除されていた。また周囲の架空存在は駆逐され脅威は存在しなかった。

「……助けられなかったな」

そんな中、ぽつりとツバサは洩らした。

竜種を打倒したことに心躍らされることも無く、なのはの危機に何も出来なかったことを悔やんだ。

全力全開を文字通り行った末に魔力切れ陥り、MMJAが解除され空を飛ぶことが出来なかった。文字通り指を咥えて見守ることし



か出来なかった。

忸怩たる何かを覚える。

「私／うちは　っ！」

沈みゆく太陽に向け、叫んだ。

ツバサを知る者が見れば目を丸くしておどろく光景だろう。

ツバサは泣いているように、否、真正銘声なく啼いていた。慟  
哭といつていいだろう。自分の無力さに惨めになりながら、啼いて  
いた。そして、　決意する。

「　強くなるっ！」

それは断固たる決意の表明。

ツバサは誓う。

手から決して零れ落ちないように　、

この手で掬い上げられるように　、

強くなると。

だからこそ、泣くのは今日でお仕舞い。

みんなの前ではいつも笑顔でいよう、いる。絶対に。

背後から聞こえてくる重機の起動音。

迎えに来た強化外骨格だろう。確かカムラギという名前だった気が  
する。

そう言えばパイロットの人にお礼を言ってなかったっけ。涙をぬ  
ぐいながらツバサは思い出す。

先ずはお礼を言おう。

瞳は赤いまま。それでも笑顔を作ろうと努力する。  
不細工な顔でお礼なんていいたくない。だから笑顔で、満面の笑みで。さあ、振り向こう。みんながまつてるんだから。

そうして彼女たちは短くされど熱い戦いを終え日常へと帰還する。  
5011小隊と実験重機動歩兵小隊派遣隊の去った戦場では、竜種が討たれたゆえに総崩れになった架空存在に対して残敵掃討に任務を移行した統合軍兵士たちが鬱憤を晴らすために苛烈なまでに攻撃を加えていた。故に、もう暫く戦場音楽が止みそうに無かった。

＊

「状況終了つと」

液晶モニターの発する光以外光源の無い薄暗い室内で、報告書を書き上げ片倉は言った。

後に『第二次北海道会戦』と呼称されることになる戦闘から既に一週間が経過していた。戦闘自体は多大なる犠牲を払いながらも架空存在の撃滅に成功している。

不確定要因は敵味方双方に多々あるものの、ほぼ片倉の予想通りの結果であった。

第三世代機『カムラギ』と試製59式75mm魔力砲及びMMJ A-L02の実戦突入により判明した種々雑多な大小の問題点とそれによる改善点。そして異世界の白き魔法少女の有用性の証明。コンバット・ブルー思

わず小躍りしそうになるほど喜ばしい結果であり、片倉にとって何を持って也得難い最大級の戦果である。と同時に内面の奥底に澱の様にどす黒いものが沈殿するのを自覚する。

「まったく……」

呆れるね。

覚悟しているはずなのにこれだ。呆れるしかない。呆れるほど弱い自分に嫌気がさす。彼女たちはあれほど強いのに、大の大人のボクがこれではどうしようもない。

片倉は自らを卑下していると来客を告げる連絡が妙にテンションの高い副官から入る。妙にそのことが気にかかりながらも、訪問客の名を聞き気が滅入った。訪問客は今最も会いたくない人物たち要するに魔法少女たちである。

「……ははっ、会わないって選択肢もあるけれど、それを選ぶなんて」

後続く言葉を飲み込むと、既に冷え切っているコーヒーを一気に飲み干した。

「不味いね」

顔を顰める。まるで今の気分のようだ。

そんなことを考えながら立ち上がるといつもの笑みを作り立ち上がる。本当の表情を隠すという意味においてそれはポーカーフェイスと何等変わらないものだった。

ロックを解除しドアを開ける。

四人の少女たちが仲良く笑みを浮かべ揃い立っている。

「どうしたんだい？　今日は久しぶりのオフだ」

ろうつと続く言葉は出なかった。その変わりに涙が出そうになった。悲しくて泣くんではなく、心から嬉しくて泣くような、そんな涙だった。

『ありがとう片倉さん』

心からの笑みを浮かべ、四人の少女が彼にそんなことを言った。いつてしまえば只の言葉なのかも知れない。それでもその言葉は何物にも代えがたい宝物のように片倉には思えた。それは宝箱の一番奥底に眠っているもの、そう片倉は宝物／希望を手に入れたことを自覚し、本物の笑みを彼女たちのように心から浮かべる。

そして、彼女たちを真正面から向き合い真心を込めて、

## Ep. 06 (後書き)

これにて打ち止め、完結です。  
少しでも楽しんでもらえたなら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4708u/>

---

とある魔法少女のクロニクル

2011年7月10日15時56分発行